

福岡県遠賀郡遠賀町所在城ノ越貝塚の第1次調査出土資料：九州大学総合研究博物館収蔵資料の研究

福永，将大
九州大学総合研究博物館

<https://doi.org/10.15017/7171717>

出版情報：九州大学総合研究博物館研究報告．21，pp.17-51，2024-03-31．The Kyushu University Museum

バージョン：

権利関係：



福岡県遠賀郡遠賀町所在城ノ越貝塚の第1次調査出土資料 ——九州大学総合研究博物館収蔵資料の研究——

福永 将大

九州大学総合研究博物館：〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1
fukunaga@museum.kyushu-u.ac.jp

要旨：九州大学総合研究博物館に所蔵されている、福岡県遠賀郡遠賀町所在の城ノ越貝塚第1次調査出土資料について、その調査概要と出土遺物の報告を行った。出土した弥生土器を検討した結果、弥生時代前期後半の板付Ⅱa式土器～中期後半の須玖Ⅱ式土器が出土しており、特に中期初頭の城ノ越式土器と中期前半の須玖Ⅰ式土器が主体をなしていることがわかった。また、第1次調査における層位状況と出土土器について検討した結果、層位と土器の新旧が明確に対応するようなあり方を見出すことは困難であることも指摘した。

キーワード：九州大学総合研究博物館収蔵資料、資料報告、城ノ越貝塚、弥生時代

1. はじめに：城ノ越貝塚第1次調査資料報告の意義

城ノ越貝塚は、弥生時代中期初頭に位置づけられる城ノ越式土器の標式遺跡である。福岡県遠賀郡遠賀町大字上別府に所在し、遠賀川下流西岸の丘陵裾部に位置する。現在、遺跡地には石碑と説明パネルが設置されている(写真1)。

城ノ越貝塚は過去2回にわたって発掘調査がなされている。第1次調査は、昭和27(1952)年に鏡山猛氏を調

査主任として実施された調査、第2次調査は、昭和33(1958)年に杉原莊介氏を調査主任として実施された調査である。これらの発掘調査は、昭和26(1951)年に日本考古学協会の中に設置された、弥生式土器文化総合研究特別委員会による全国規模での発掘調査・研究事業の一環として実施されたものである。それら調査・研究成果については、昭和36(1961)年に刊行された『日本農耕文化の生成』において報告されており(杉原編1960・1961)、城ノ越貝塚の発掘調査成果についても同書で報告されている(鏡山ほか1961)。

しかし、『日本農耕文化の生成』の中で報告されているのは、主に第2次調査成果の概要であり、第1次調査については、一部の石器・骨角器が報告されているのみで、その調査成果の詳細は報告されていない。『日本農耕文化の生成』では、第2次調査で確認した土器の層位的出土状況が、城ノ越式土器の設定の根拠となっている(鏡山ほか1961)。ただし、『日本農耕文化の生成』でも、必ずしも層位と出土土器との関係がデータとして明確に示されているわけではない。遺跡の堆積状況と土器の出土状況について、第1次調査成果も含めた再評価が必要であろう。



写真1 城ノ越貝塚(筆者撮影)

九州大学総合研究博物館には、上述した昭和27(1952)

年の第1次調査で出土した資料が収蔵されている。パンケース22箱と木箱3箱で、資料は洗浄されており、各資料には出土位置情報が注記された状態で収蔵されていた。また、第1次調査の調査日誌や図面、写真は、九州大学考古学研究室が所蔵している。

本稿では、城ノ越貝塚第1次調査の概要について、調査日誌などに基づいて報告する。また、当館所蔵の出土資料についても紙数が許す限り報告したい。城ノ越式土器については、『日本農耕文化の生成』での設定後も多くの研究者によってその評価・位置づけについて議論がなされてきている（森1966；小田1973；田崎1985；武末1987・2011；石田2015；齋藤2022）。こうした研究状況を鑑みて、城ノ越式土器の標式遺跡である、城ノ越貝塚第1次調査資料の整理・報告は、学術的・学史的にも意義あるものと考えた。

2. 城ノ越貝塚第1次調査について

昭和27（1952）年に実施された城ノ越貝塚第1次調査は、上述のとおり、昭和26（1951）年に日本考古学協会の中に設置された、弥生式土器文化総合研究特別委員会による全国規模での発掘調査・研究事業の一環として実施されたものである。調査期間は、昭和27（1952）年8月7日から8月13日までの7日間。調査参加者は以下の通りである。

《調査参加者》

日本考古学協会弥生式専門委員会委員長

明治大学助教授 杉原荘介

調査主任 九州大学助教授 鏡山猛

九州大学研究生 渡辺正気

嘉穂高等学校 花村與録

嘉穂高等学校 生徒ら6名

八幡高等学校 生徒1名

名和洋一郎

小倉高等学校 生徒2名

嘉穂高等学校 牧山

原口信行

小倉高等学校 田頭喬

明治大学助手 大塚初重

明治大学学生 岡本勇

調査の経緯については、九州大学考古学研究室所蔵の調査日誌に詳しい。なお、同研究室所蔵資料の中には、調査日誌や図面、写真のほかに、書きかけの調査報告書原稿も存在しており、第1次調査成果を報告する計画があったことがわかる。以下、調査日誌に記載されている内容を記す（文体・用語などは調査日誌のママ。●印は判読不可能だった箇所を示している）。

◆昭和二十七年八月七日 晴夕立あり後曇り

午後、調査参加者現地に相会し明日よりの調査の諸準備をした。即ち、鏡山先生は山口県岩田遺跡より帰り午後1時半遠賀川駅に下車。遠賀村役場にて村長・公民館主事と会い、調査に関する依頼、打合せを行った。調査員の宿所は同村木守部落の白石市三郎氏方となった。ついで公民館主事と同道にて遺跡地主及び遺跡地の駐在員宅に挨拶まわりをした。

渡辺やはり午後現地に到着し、鏡山先生と連絡の上、役場より平板測量具、スコップなどを借り、又、調査用員の買物をした。

なお、本日より嘉穂高等学校花村与録先生、同校生徒五名を引率されて来援され、以上の諸準備を共にした。その宿舎は同村花園部落の白石ナホコ氏方である。

又、名和洋一郎氏、八幡高等学校生徒安居君と現場に来られた。

本日風もあって盛夏といえどもしのぎよかった。当地方は一月おくれの七夕祭りで軒毎に笹がざりがあった。

◆八月八日 晴

本日より発掘調査を開始する。貝塚の中心と思われる所にポケットを二つ掘る。東側（厳密には東北側である。以下東側と略称する）のものは、東西（厳密には東北から西南。しかし以下東西と略称する）2m、南北（厳密には西北から東南。しかし以下南北と略称する。）1mの長方形でこれをA区と名づけた。西側（厳密には西南側であるが以下西側と略称する）のものは、東西（厳密には東北から西南。しかし以下東西と略称する）2m、南北（厳密には西北から東南。しかし以下南北と略称する）2mの長方形で、これをP区と名づけた。A区とP区の北辺は同一線上にあって、その距離は1m70cmである。（こ

のA区とP区の間はのちにB区となづけられた。) (第1図)

A区は渡辺担当にて10cm ずつ掘り下げて行き、この日第5層にいたる。層別に遺物を採集し、A1よりA4迄採集。

P区は鏡山先生担当にて最初地表より50cm 迄を掘り、その遺物をP1とし、次して50cm より90cm 迄をP2として発掘採集した。なお西端附近はとくに150cm 迄掘り下げ、地表より150cm 迄のものを一括してPPとし一括採集した。

A区

2m × 1m

渡辺担当にて10cm ごと下げる

第五層にいたる

整理番号 A1→A4

P区

2m × 2m

略号 P. P 1.5m の深さに掘り下げし

整理番号 P1…表土より50cm 迄

P2…50cm より-90cm まで

遺物 -80cm より動物(猪か)下顎骨検出す

・作業員：鏡山、渡辺、名和、生徒(小倉高2, 八幡高1, 嘉穂高5)

・参観：若松東筑高校社会科教官諸氏

・写真：発掘前の遺跡1, P2の動物骨及土器2, A地点とP地点を俯瞰1

・名和君より城ノ越と花園の遺物を借用(遠賀川式有文土器1片, 靱痕ありという土器片1, 石鏃2, 石棒1, 石剣1, 石のみ1)。

◆八月九日 晴

P区

掘り下げ続行。一部貝層のつきる所までさげる。

P2…-50~-90cm

P3…-90~-100cm

P4…-100cm 以下貝層底まで

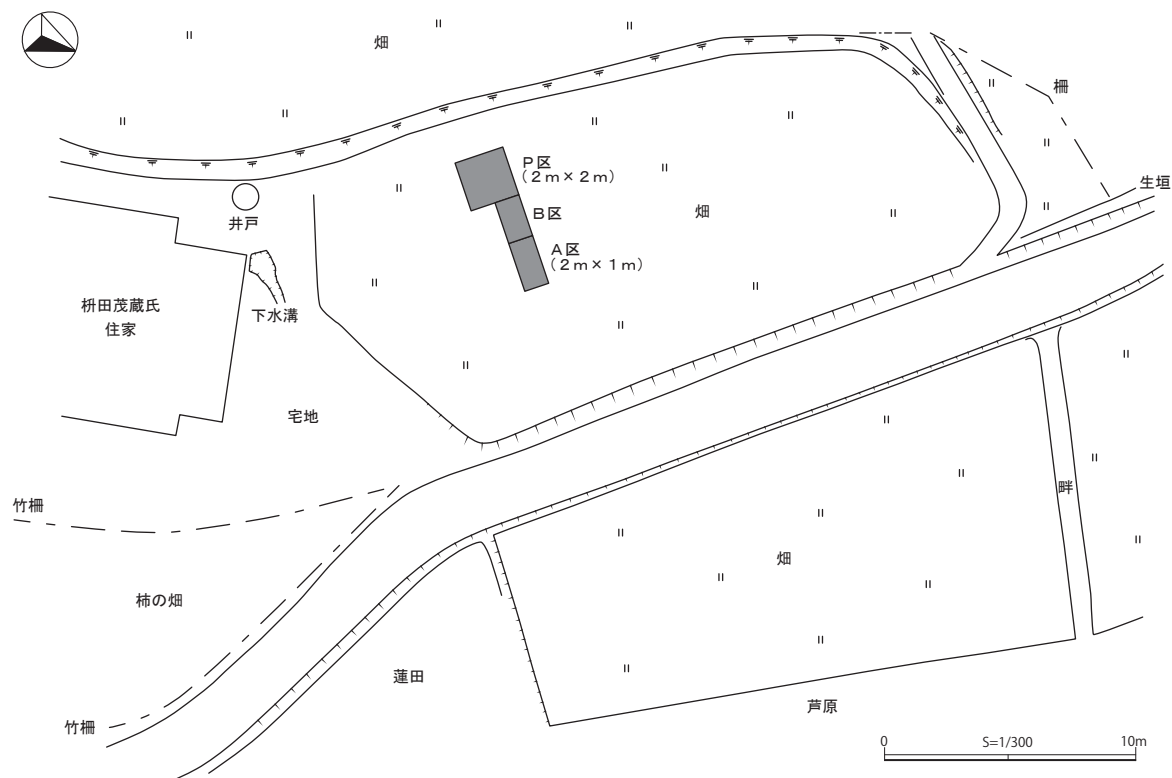
P4より石包丁破片1。

P2より弓弭形角製品。午前10時出現。深さ-60cm。これより少し前に骨製紡錘車露出。-90cm。

A区

A5, A6 計20cm 掘り下げる。

石錘一個四隅打かきあり。



第1図 城ノ越貝塚第1次調査区位置図

須恵器の大なる破片あり。

- ・作業員：前日と同じ。三宅君来援。
- ・見学：柴田氏（八幡製鉄）
- ・写真：弓弭形角製品出土状態，試掘孔全景と近景
- ・猪下顎骨
- ・貝層の状況：P区の山の手に多し。しじみが最も多い。
他にアワビ，カキ，タニシ等あり。
- ・P2-タイの下顎骨，A6-同じものあり
- ・本日も快晴であるが炎暑になやまされる。

◆八月十日 晴

P区

P5 slopeの下部層。

P6 盤土の中にまじる貝の層低層。

発見品中の主なもの：磨製片刃石斧，錘石，石鏃

A区

断面により土層の傾斜状況が判明した。須恵器混入の理由も明かとなる。

- ・午後平板測量を実施する。
- ・本日，嘉穂高等学校花村与録先生は帰校。交替として牧山先生到着。
- ・見学者：柴田喜八氏（若松），原口信行氏
- ・朝，遺跡附近の地形変遷を知る記録をたずねて木守の村●氏をたずねた所，同家に●●中の●長ありて驚く。
- ・夕刻遅くまで作業継続。原口氏同泊。黄昏炭坑街の燈火をはるかにのぞみ田園道を宿舎にかえる。

◆八月十一日 晴

P区

P6'…貝層の直下 昨日の続き

P7'…貝層下の下位の混らない土層より発見

P区よりの発見品：石斧，石剣

B区

表土下50糎まで除去す。

- ・A区とP区の上にB区を設け，A，Pを連続させる。
- ・B区調査の主目標
①A地区の壁面に現われる土器を含むの少い間層

の在り方を追求する

②AとPとの間を接続させる

※結果的にはA，Bを通じて貝塚層位の探求になって了った。

- ・田頭喬氏来援。
- ・杉原，大塚，岡本が午後6時来着。宿舎に来る。鏡山出迎。
- ・同じ列車で名和洋一郎君の外に6名見学に来る。
- ・他に本日の見学者：若松高等学校生徒，椿（長府博物館長）●村（下関）等
- ・本日，田頭，名和氏同宿。

◆八月十二日 晴

P区

P区の地盤を調査する。貝層の下部の土層をしらべる。試掘孔下底西南隅のなだれ貝層あり。この貝層下は●黒褐色土ありて更にその下に赤褐色粘土層あり。この赤褐色粘土層は地盤で遺物ふくまれず。その上に被している●灰色の粘土層中には土器片少量，獣骨，木炭片等あり。

P区の整理番号

P8…下層貝層中の遺物

P9…●灰色粘土層中（最下層包含層）の遺物

B区

B区とA区との中間30糎位残していたのを除去す。10時頃表土より5糎内外の所で寛永通宝を得。鉄鏃を得。祝部と共伴す。

夕方，P区に近く壺形土器の完形に近いものを得。撮影の後に大騒ぎす。

A 大塚，渡辺氏の所 B10口の途中まで

B 岡本氏の所 B11の始め頃で止む

上層—●●鉄鏃1検出

- ・嘉穂高校本日を以て引きあげることとなり，午後5時現場を去る。
- ・鏡山は折尾の土木事務所に遺物運搬依頼のため行く。午後3時より30分間。
- ・村長，教育庁，出張所長，中村公民館主事等見学。

◆八月十三日 晴（一日延長す）

孟蘭盆会となったが作業は最後の段階となって●●●

続けることとした。P区とB区を●●れて地盤層まで掘り下げる。午後4時、一旦作業を終了。埋戻しは地主に依頼して引き上げる。宿舎で荷造をして、午後7時過ぎの博多行列車で一行は現場をはなれる（鏡山、渡辺、杉原、岡本、大塚）。

B区

岡本氏 B11は須玖の層と云い続行す

大塚、渡辺氏 B12で遠賀の層を追求

最後にB11とB12、B13は各人の鍬の進む所、余り判然と区別出来ず。

以上、調査日誌に記されている発掘調査の経緯を見る限り、数十cm単位の人工層位で掘り下げながら、堆積状況と遺物出土状況の把握に注意を払っていることがわかる。

より詳細に見てみると、A区の調査では、貝層上部から弥生土器が出土する一方で、下部から須恵器が出土することに困惑している様子が窺える。調査の進展により、P区からA区にかけて傾斜して堆積していること、さらに、P区の上部貝層を削平してA区側に土を移し造成したことが判明したため、貝層下部の須恵器出土問題は解決したと考えたようだ。B区東側からA区にかけて、上部に古墳時代以降の二次堆積層が堆積していることが明らかになったわけだが、それ以外の部分は、後世の攪乱などは受けていないと判断している。

また、B区最下層付近の堆積時期に関する評価は、調査最終日まで議論になっていたようだが、残された土層図を見る限り、遠賀川式土器の層と須玖式土器の層が、上下に区別されて示されている（第2・3図）。

こうした堆積状況と遺物出土状況の把握に注意を払う第1次調査における調査方針や、そこで得られた調査成果は、のちの第2次調査にも基礎的なデータとして継承されたものと考えられる。その結果、『日本農耕文化の生成』における、土器の層位的出土状況を根拠とした城ノ越式土器の設定（鏡山ほか1961）につながったものと評価できよう。

3. 城ノ越貝塚第1次調査出土資料について

九州大学総合研究博物館に収蔵されている城ノ越貝塚

第1次調査出土資料の大半は、弥生土器である。そのほか須恵器や土師器、瓦がある程度まとまった量確認できるとともに、中世の青磁・白磁片も少数見られる¹。

石器はごく少量で、第4図に示した石包丁（「P4」出土）の破片が確認できる以外は、西北九州産黒曜石や安山岩の剥片が少量認められるに過ぎない。『日本農耕文化の生成』では、土器以外の遺物の好資料は第1次調査に多いため、石器・骨角器は第1次調査出土のものを中心に報告したとされる（鏡山ほか1961）²。

また、木箱に収蔵されている資料も存在しており（全部で3箱分）、そのうち2箱には未洗浄の弥生土器胴部片などが、1箱には貝層から出土したと考えられる貝資料が入っている。

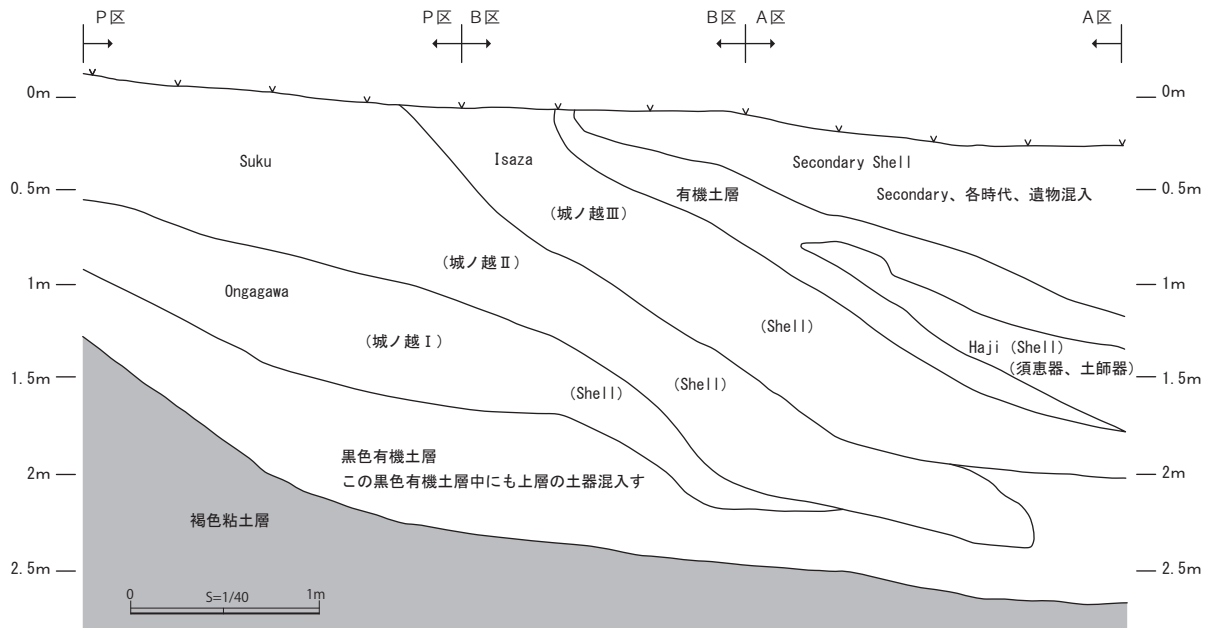
2022年5月から、これら資料の整理作業を開始した。まず収蔵資料の全体像を把握した上で、弥生時代の遺物とそれ以外の時期の遺物に分けて、大半を占める弥生土器の整理・報告を行う方針を固めた。弥生時代の貝資料や、古墳時代以降の遺物の整理・報告に関しては今後の課題としたい。

弥生土器の多くはすでに洗浄されており、各資料には出土位置情報が注記された状態で収蔵されていた。そのため、形態や装飾に特徴がある資料をピックアップして、実測を開始した。実測個体は343点で（第1表）、口縁部や底部は小片であっても図化している。

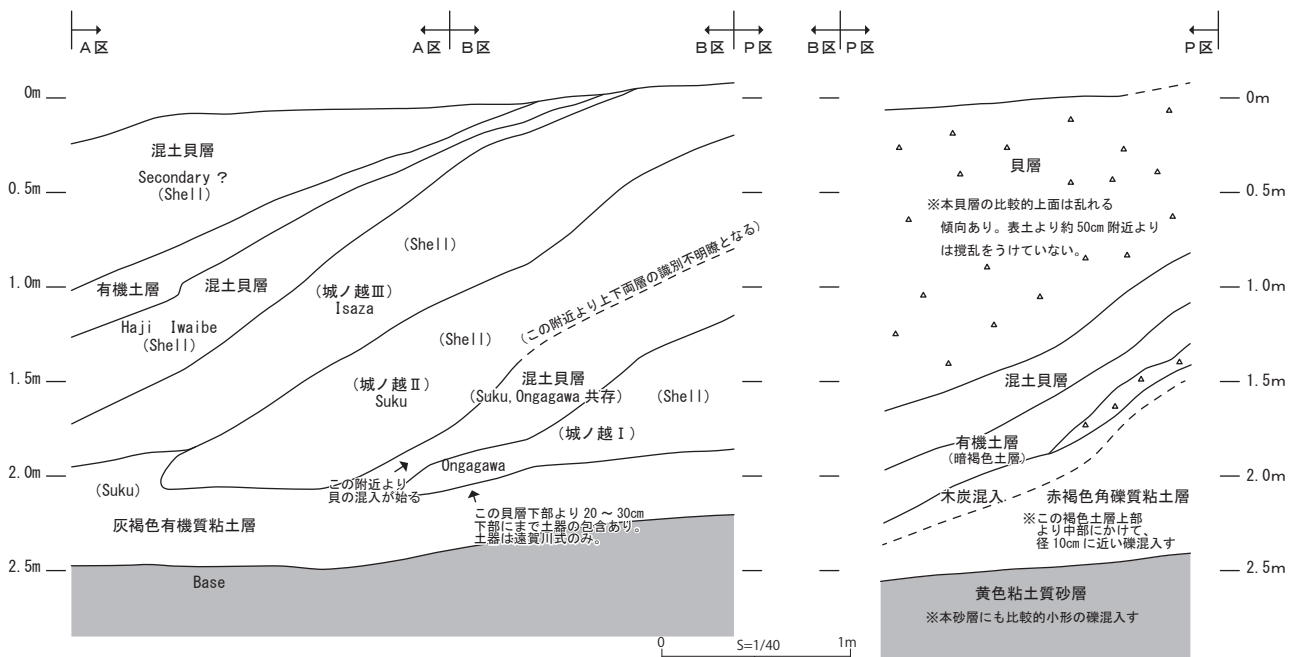
紙数が限られており、図化した資料をすべて報告することはできない。そのため、甕形土器、壺形土器、その他の器種という形で大きく器種分類し、かつ、甕形土器と壺形土器に関しては、その形態的・装飾的特徴に基づいて分類し、各分類単位の代表的な資料のみを報告することとした。

（1）甕形土器

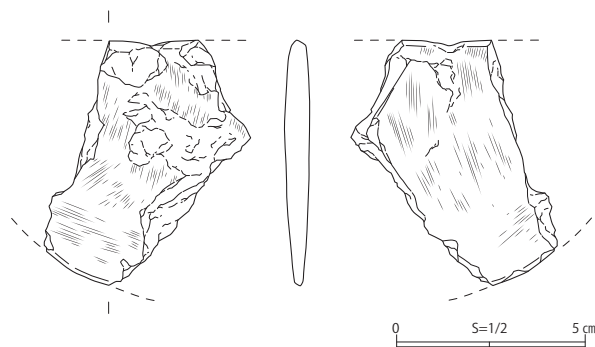
収蔵されている弥生土器の中で多くを占めるのが、この甕形土器である。甕形土器を分類するにあたって、田崎博之氏の口縁部形態に基づいた系譜の分類を参考にし（田崎1985）、大きくA類とB類に大別した。A類は、如意形あるいは「く」字形に口縁部を折り返すもので、田崎氏のA系譜に相当する。一方、B類は、口縁部断面が三角形や「コ」字形をなすもの、あるいは鋤先口縁をもつもので、田崎氏のB系譜に相当する³。



第2図 城ノ越貝塚第1次調査 トレンチ北壁土層図



第3図 城ノ越貝塚第1次調査 トレンチ南壁土層図



第4図 第1次調査出土石包丁

第1表 ①

[illegible]

② 第1表

No.	図番号	器種	残存部位	分類	粘土			色質		底部	胴部下(内)		胴部上(内)	頸部(内)	口縁部(内)	口縁部(外)	頸部上(外)	胴部上(外)	胴部下(外)	整理番号
					金	灰	砂	白色砂	角石		赤褐色	繊維								
70	第13組-1	釜	底部	素AⅢaⅠaⅠ類	0.5~1mm	○	7.57R6/3にふい	107R6/3にふい	107R6/3にふい	横	横	横	横	横	横	横	横	横	横	70
71	第13組-1	釜	口縁部	素AⅢaⅠaⅠ類	0.5mm	◎	107R7/2にふい	107R7/2にふい	107R7/2にふい	横	横	横	横	横	横	横	横	横	横	71
72	第11組-1	甕	口縁部	素AⅢaⅠaⅠ類	0.5~1mm	◎	57R5/1にふい	57R5/1にふい	57R5/1にふい	横	横	横	横	横	横	横	横	横	横	72
73	第11組-1	甕	口縁部	素AⅢaⅠaⅠ類	0.5mm	◎	57R5/2にふい	57R5/2にふい	57R5/2にふい	横	横	横	横	横	横	横	横	横	横	73
74	第14組-3	甕	口縁部	素AⅢaⅠaⅠ類	0.5mm	◎	57R6/3にふい	57R6/3にふい	57R6/3にふい	横	横	横	横	横	横	横	横	横	横	74
75	第11組-2	甕	口縁部	素AⅢaⅠaⅠ類	0.5mm	◎	57R6/4にふい	57R6/4にふい	57R6/4にふい	横	横	横	横	横	横	横	横	横	横	75
76	第11組-2	甕	口縁部	素AⅢaⅠaⅠ類	0.5mm	◎	57R6/5にふい	57R6/5にふい	57R6/5にふい	横	横	横	横	横	横	横	横	横	横	76
77	第11組-2	甕	口縁部	素AⅢaⅠaⅠ類	0.5mm	◎	57R6/6にふい	57R6/6にふい	57R6/6にふい	横	横	横	横	横	横	横	横	横	横	77
78	第29組-14	甕	口縁部	素AⅢaⅠaⅠ類	0.5mm	◎	57R6/7にふい	57R6/7にふい	57R6/7にふい	横	横	横	横	横	横	横	横	横	横	78
79	第29組-14	甕	口縁部	素AⅢaⅠaⅠ類	0.5mm	◎	57R6/8にふい	57R6/8にふい	57R6/8にふい	横	横	横	横	横	横	横	横	横	横	79
80	第22組-2	甕	底部	素AⅢaⅠaⅠ類	0.5mm	◎	57R6/9にふい	57R6/9にふい	57R6/9にふい	横	横	横	横	横	横	横	横	横	横	80
81	第11組-2	甕	底部	素AⅢaⅠaⅠ類	1~2mm	△	57R4/1にふい	57R4/1にふい	57R4/1にふい	横	横	横	横	横	横	横	横	横	横	81
82	第11組-2	甕	底部	素AⅢaⅠaⅠ類	0.5~1mm	△	57R5/2にふい	57R5/2にふい	57R5/2にふい	横	横	横	横	横	横	横	横	横	横	82
83	第30組-6	甕	口縁部	素AⅢaⅠaⅠ類	0.5~1mm	△	57R7/3にふい	57R7/3にふい	57R7/3にふい	横	横	横	横	横	横	横	横	横	横	83
84	第30組-6	甕	口縁部	素AⅢaⅠaⅠ類	0.5~1mm	△	57R6/4にふい	57R6/4にふい	57R6/4にふい	横	横	横	横	横	横	横	横	横	横	84
85	第9組	鉢	口縁部	素AⅢaⅠaⅠ類	0.5mm	△	57R6/4にふい	57R6/4にふい	57R6/4にふい	横	横	横	横	横	横	横	横	横	横	85
86	第25組-1	甕	口縁部	素AⅢaⅠaⅠ類	0.5~1mm	◎	57R6/5にふい	57R6/5にふい	57R6/5にふい	横	横	横	横	横	横	横	横	横	横	86
87	第25組-1	甕	口縁部	素AⅢaⅠaⅠ類	0.5mm	◎	57R6/6にふい	57R6/6にふい	57R6/6にふい	横	横	横	横	横	横	横	横	横	横	87
88	第9組	甕	口縁部	素AⅢaⅠaⅠ類	0.5mm	◎	57R6/7にふい	57R6/7にふい	57R6/7にふい	横	横	横	横	横	横	横	横	横	横	88
89	第9組	甕	口縁部	素AⅢaⅠaⅠ類	0.5mm	◎	57R6/8にふい	57R6/8にふい	57R6/8にふい	横	横	横	横	横	横	横	横	横	横	89
90	第9組	甕	口縁部	素AⅢaⅠaⅠ類	0.5mm	◎	57R6/9にふい	57R6/9にふい	57R6/9にふい	横	横	横	横	横	横	横	横	横	横	90
91	第9組	甕	口縁部	素AⅢaⅠaⅠ類	0.5~1mm	△	57R6/10にふい	57R6/10にふい	57R6/10にふい	横	横									

第1表

[illegible]

④
第1表

[illegible]

第1表 ⑤

No.	図番号	注記	器種	残存部位	分類	胎土		色調		底部	胴部下(内)	胴部上(内)	頸部(内)	口縁部(内)	口縁部(外)	頸部(外)	胴部上(外)	胴部下(外)	整理番号
						白褐色砂粒	角片 名	赤褐色 微粒	外面	内面									
277	第24図-1	P-6	甕	口縁部～胴部	Ⅱa類	1mm	○		2.5YR5/4にふい	5YR5/6赤褐色	—	—	—	—	—	—	—	—	282
278	第24図-2	P-9	甕	口縁部	Ⅱb類	0.5mm	○		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	283
279	第24図-3	A2/A4	鉢	口縁部	Ⅱc類	0.5～1mm			2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	284
280	第24図-4	P-5	鉢	口縁部	Ⅱd類	0.5～1mm	○		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	285
281	第24図-5	P-6	鉢	口縁部	Ⅱe類	0.5mm	○		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	286
282	第24図-6	P-3	甕	口縁部	Ⅱf類	0.5mm	○		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	287
283	第24図-7	P-4	甕	口縁部	Ⅱg類	1mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	288
284	第24図-8	B9/G	甕	口縁部	Ⅱh類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	289
285	第24図-9	B10/G	甕	口縁部	Ⅱi類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	290
286	第24図-10	B11	甕	口縁部	Ⅱj類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	291
287	第24図-11	B12	甕	口縁部	Ⅱk類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	292
288	第24図-12	B13	甕	口縁部	Ⅱl類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	293
289	第24図-13	B14	甕	口縁部	Ⅱm類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	294
290	第24図-14	B15	甕	口縁部	Ⅱn類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	295
291	第24図-15	B16	甕	口縁部	Ⅱo類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	296
292	第24図-16	B17	甕	口縁部	Ⅱp類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	297
293	第24図-17	B18	甕	口縁部	Ⅱq類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	298
294	第24図-18	B19	甕	口縁部	Ⅱr類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	299
295	第24図-19	B20	甕	口縁部	Ⅱs類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	300
296	第24図-20	B21	甕	口縁部	Ⅱt類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	301
297	第24図-21	B22	甕	口縁部	Ⅱu類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	302
298	第24図-22	B23	甕	口縁部	Ⅱv類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	303
299	第24図-23	B24	甕	口縁部	Ⅱw類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	304
300	第24図-24	B25	甕	口縁部	Ⅱx類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	305
301	第24図-25	B26	甕	口縁部	Ⅱy類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	306
302	第24図-26	B27	甕	口縁部	Ⅱz類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	307
303	第24図-27	B28	甕	口縁部	Ⅲa類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	308
304	第24図-28	B29	甕	口縁部	Ⅲb類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	309
305	第24図-29	B30	甕	口縁部	Ⅲc類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	310
306	第24図-30	B31	甕	口縁部	Ⅲd類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	311
307	第24図-31	B32	甕	口縁部	Ⅲe類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	312
308	第24図-32	B33	甕	口縁部	Ⅲf類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	313
309	第24図-33	B34	甕	口縁部	Ⅲg類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	314
310	第24図-34	B35	甕	口縁部	Ⅲh類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	315
311	第24図-35	B36	甕	口縁部	Ⅲi類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	316
312	第24図-36	B37	甕	口縁部	Ⅲj類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	317
313	第24図-37	B38	甕	口縁部	Ⅲk類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	318
314	第24図-38	B39	甕	口縁部	Ⅲl類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	319
315	第24図-39	B40	甕	口縁部	Ⅲm類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	320
316	第24図-40	B41	甕	口縁部	Ⅲn類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	321
317	第24図-41	B42	甕	口縁部	Ⅲo類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	322
318	第24図-42	B43	甕	口縁部	Ⅲp類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	323
319	第24図-43	B44	甕	口縁部	Ⅲq類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	324
320	第24図-44	B45	甕	口縁部	Ⅲr類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	325
321	第24図-45	B46	甕	口縁部	Ⅲs類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	326
322	第24図-46	B47	甕	口縁部	Ⅲt類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	327
323	第24図-47	B48	甕	口縁部	Ⅲu類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	328
324	第24図-48	B49	甕	口縁部	Ⅲv類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	329
325	第24図-49	B50	甕	口縁部	Ⅲw類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	330
326	第24図-50	B51	甕	口縁部	Ⅲx類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	331
327	第24図-51	B52	甕	口縁部	Ⅲy類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	332
328	第24図-52	B53	甕	口縁部	Ⅲz類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	333
329	第24図-53	B54	甕	口縁部	Ⅳa類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	334
330	第24図-54	B55	甕	口縁部	Ⅳb類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	335
331	第24図-55	B56	甕	口縁部	Ⅳc類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	336
332	第24図-56	B57	甕	口縁部	Ⅳd類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	337
333	第24図-57	B58	甕	口縁部	Ⅳe類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	338
334	第24図-58	B59	甕	口縁部	Ⅳf類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	339
335	第24図-59	B60	甕	口縁部	Ⅳg類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	340
336	第24図-60	B61	甕	口縁部	Ⅳh類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	341
337	第24図-61	B62	甕	口縁部	Ⅳi類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	342
338	第24図-62	B63	甕	口縁部	Ⅳj類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	343
339	第24図-63	B64	甕	口縁部	Ⅳk類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	344
340	第24図-64	B65	甕	口縁部	Ⅳl類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	345
341	第24図-65	B66	甕	口縁部	Ⅳm類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	346
342	第24図-66	B67	甕	口縁部	Ⅳn類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	347
343	第24図-67	B68	甕	口縁部	Ⅳo類	0.5mm	△		2.5YR5/4にふい	5YR5/6にふい	—	—	—	—	—	—	—	—	348

i) 甕A類

甕A類としたものは139点である。口縁部の形状に基づいて、さらにAⅠ類～AⅤ類の5つに細分する(第5図)。

AⅠ類…短く外反して如意形をなし、口唇部がすばまる。

AⅡ類…口縁部が「く」字形に屈曲する。

AⅢ類…口縁部が「く」字形に屈曲する。口唇部下端が肥厚する。

AⅣ類…口縁部が「く」字形に屈曲する。口唇部内面を強く撫でることで凹む。

AⅤ類…口縁部が外反して「く」字形に屈曲する。口唇部内面上端に突起を施す。いわゆる跳上口縁。

AⅠ類～AⅤ類は時間的変異を表すと考えており、AⅠ類→AⅡ類→AⅢ類→AⅣ類→AⅤ類の変化の方向性を想定している。

また、甕形土器には、装飾を施さないもの(a)、口唇部外面に刻みを施すもの(b)、胴部上半に沈線を施すもの(c)、胴部上半に突帯を施すもの(d)が認められる(第6図)。bは胴部上半に沈線を施すものも存在している⁴。また、b・cは沈線を1本施すものと、2本を並行して施すもの、さらに少数ではあるものの、3本並行して施すものも認められる。

これらa～dと、先のAⅠ類～AⅤ類との組み合わせで分類を行う(Ex. AⅠ類の口縁部を有し、口唇部外面に刻みを施すものを「AⅠb類」として分類する)。分類の結果、AⅠa類(3点)、AⅠb類(2点)、AⅡa類(35点)、AⅡb類(13点)、AⅡc類(10点)、AⅢa類(34点)、AⅢb類(9点)、AⅢc類(5点)、AⅢd類(5点)、AⅣa類(18点)、AⅤa類(4点)、AⅤd類(1点)、の全部で12の分類単位を抽出した(第7～14図)。なお、AⅠc類・AⅠd類・AⅡd類・AⅣb類・AⅣc類・AⅣd類・AⅤb類・AⅤc類の組み合わせは確認できていない。

bやcが比較的古手の要素である可能性は想起されるものの、これら装飾的要素をもって時期区分を行うことは現状では難しいと判断した。胴部上半に施される沈線や突帯と、口縁部との距離は、先学で時間差を示す要素として取り上げられているが(鏡山ほか1961; 田崎1985; 武末1987)、当該資料群に関して言えば、類似し

た特徴をもった土器群内でも沈線・突帯が施される位置にはバリエーションが存在しており、先に想定した口縁部形態の変化とも相関は見出し難い。

『日本農耕文化の生成』(鏡山ほか1961)における分類単位との関係を示すと、「城ノ越Ⅰ式土器」と「城ノ越Ⅱ式土器」が本稿AⅠ類とAⅡ類・AⅢ類の一部、「城ノ越Ⅲ式土器」が本稿AⅡ類・AⅢ類・AⅣ類の一部、「城ノ越Ⅳ式土器」が本稿AⅣ類の一部とAⅤ類に概ね相当すると考えられる。先学の諸成果を踏まえると(田崎1985; 武末1987・2011; 武末・上田2006; 石田2015など)、AⅠ類は板付Ⅱa式土器に、AⅡ類は板付Ⅱa式土器～城ノ越式土器に、AⅢ類は板付Ⅱc式土器～須玖Ⅰ式土器に、AⅣ類は須玖Ⅰ式～Ⅱ式土器に、AⅤ類は須玖Ⅱ式土器に該当しよう。

ii) 甕B類

甕B類としたものは35点で、甕A類より出土数は少ない。甕A類と同様、口縁部の形状に基づいて、BⅠ類～BⅤ類の5つに細分する(第15図)。

BⅠ類…口縁部断面の形状が三角形あるいは「コ」字形を呈する。

BⅡ類…口縁部が「L」字形に屈曲する。

BⅢ類…鋤先口縁で、口唇部が上方を向く。

BⅣ類…鋤先口縁で、口縁部上面は平坦になる。

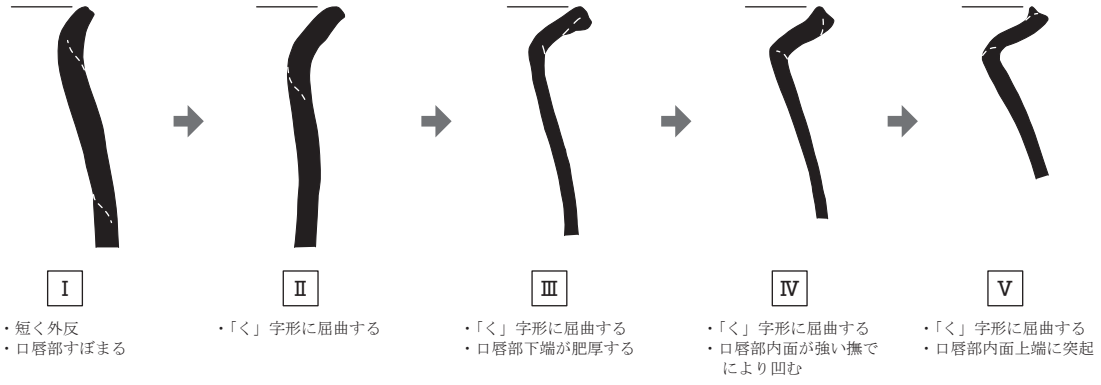
BⅤ類…鋤先口縁で、口唇部が下方を向く。

BⅠ類～BⅤ類は時間的変異を表すと考えており、BⅠ類→BⅡ類→BⅢ類→BⅣ類→BⅤ類の変化の方向性を想定している。

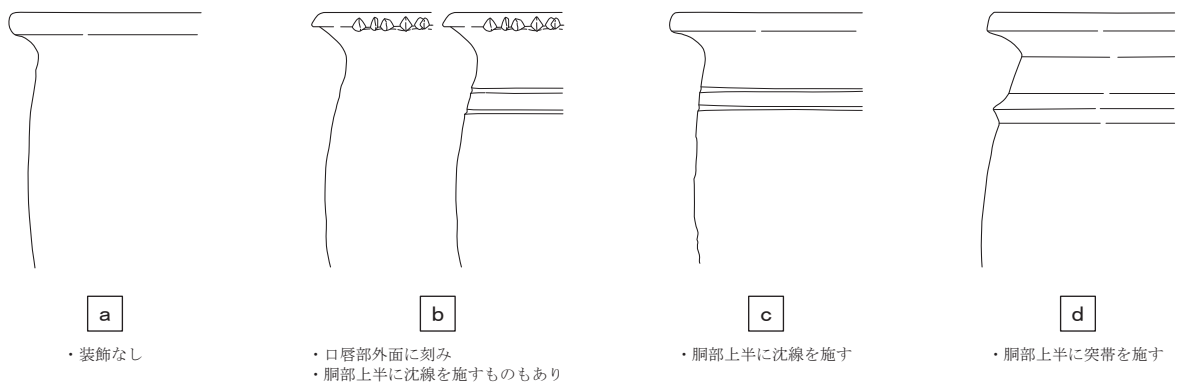
また、装飾を施さないもの(a)、胴部上半に沈線を施すもの(c)、胴部上半に突帯を施すもの(d)が認められるが、口唇部外面に刻みを施すもの(b)は確認できない(第6図)。cは沈線を1本施すものと、2本を並行して施すものの両方が認められる。

甕A類と同様、これらa・c・dと、先のBⅠ類～BⅤ類との組み合わせで分類を行う。その結果、BⅠa類(8点)、BⅡa類(4点)、BⅡc類(2点)、BⅢa類(5点)、BⅢd類(3点)、BⅣa類(8点)、BⅣd類(1点)、BⅤa類(2点)、BⅤd類(2点)、の全部で9つの分類単位を抽出した(第16～18図)。ここで示していない組み合わせは確認できていない。

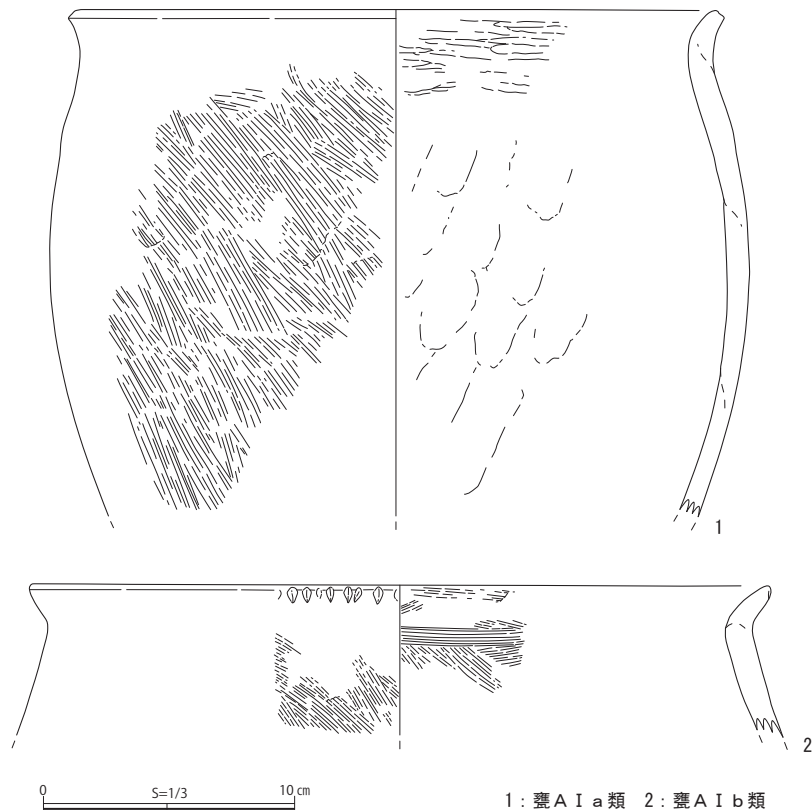
甕A類と比較して、口唇部外面に刻みを施すもの(b)



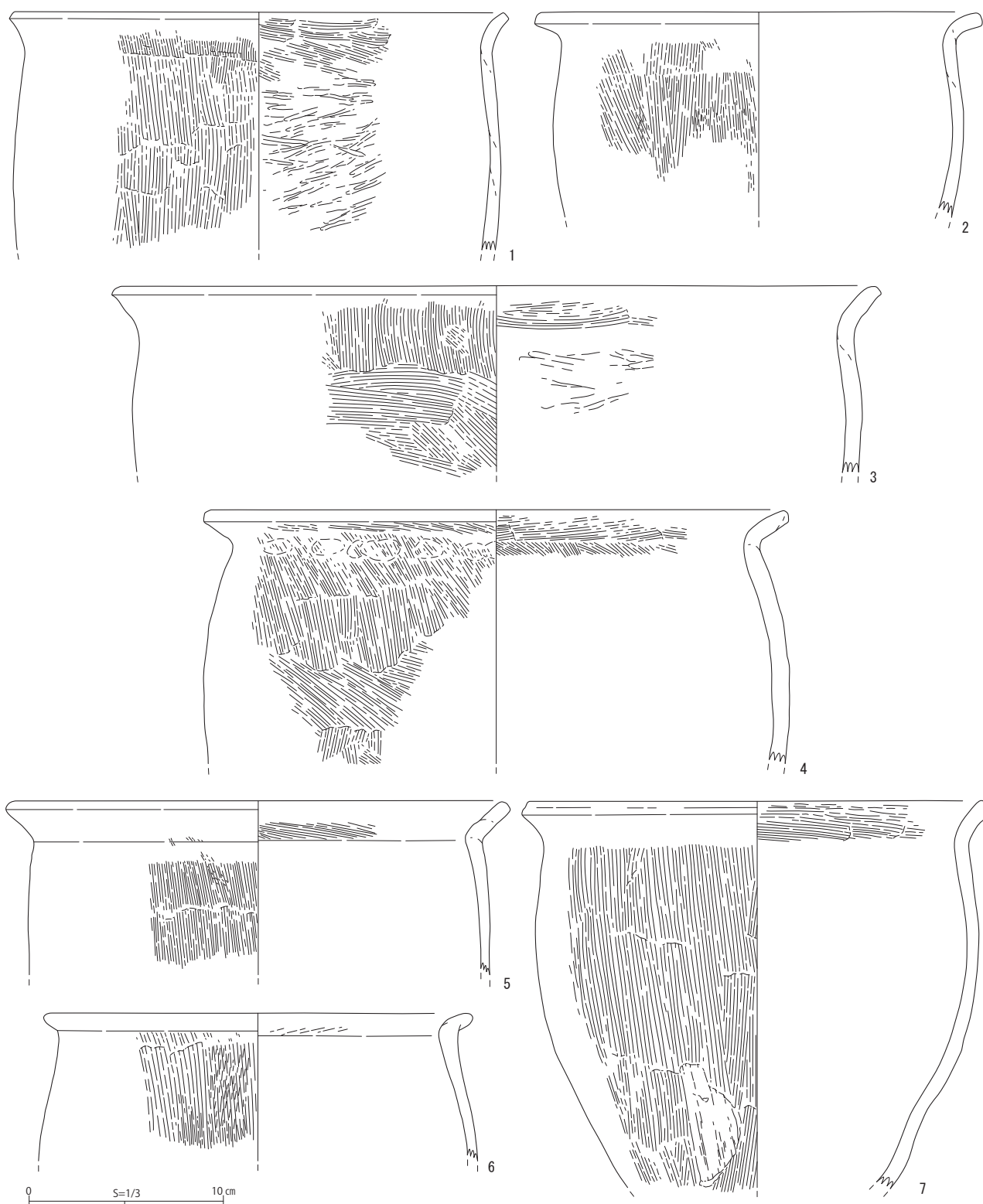
第5図 甕A類 口縁部形態の変異



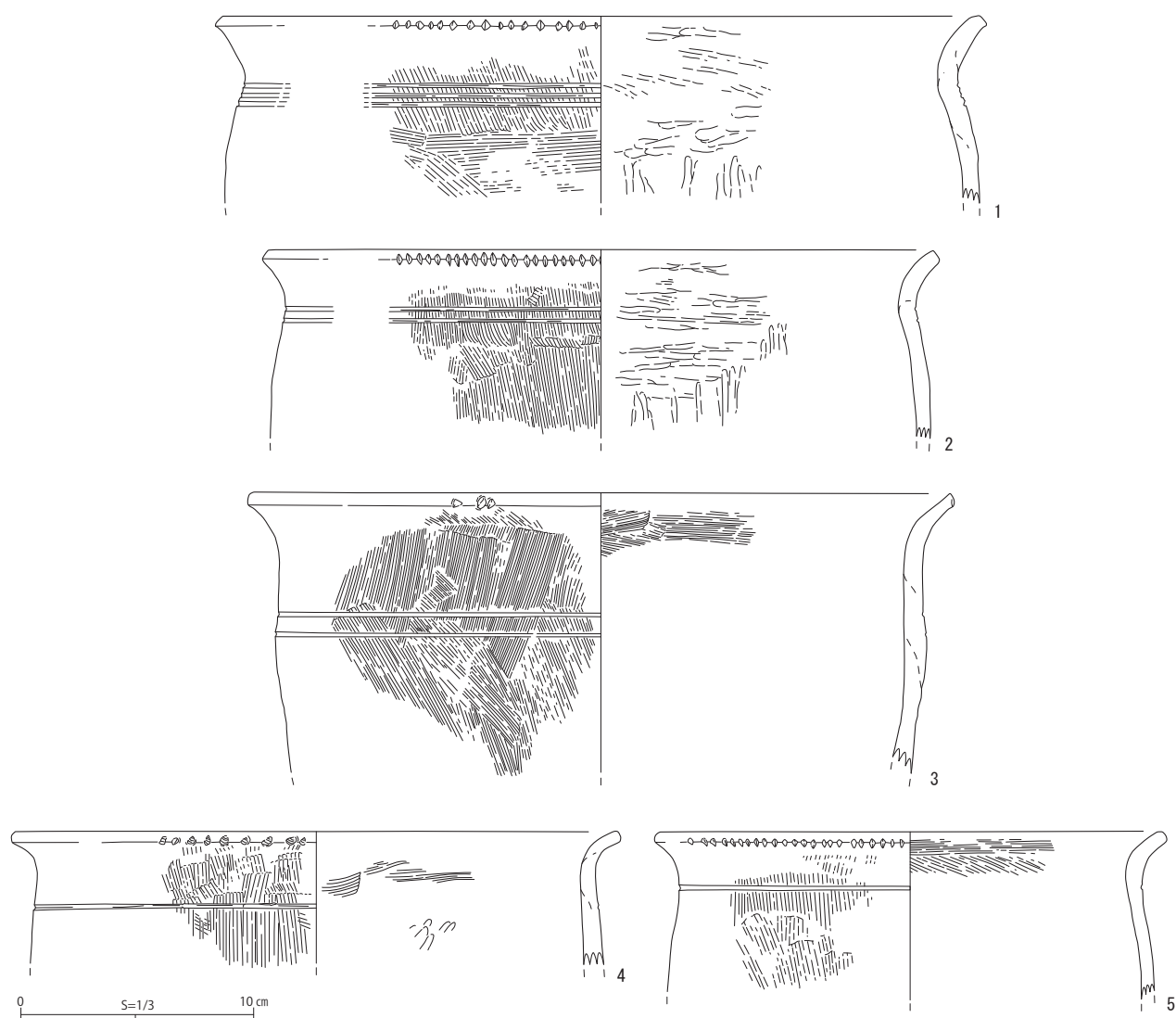
第6図 甕形土器 装飾の変異



第7図 甕A類: A I a類・A I b類



第8図 甕A類：AIIa類



第9図 甕A類：A II b類

は確認できず、胴部上半に沈線を施すもの（c）も少ない。一方、甕A類に比べて甕B類は出土数が少ないことを踏まえれば、胴部上半に突帯を施すもの（d）の出現率は、甕A類より高いことが指摘できる。

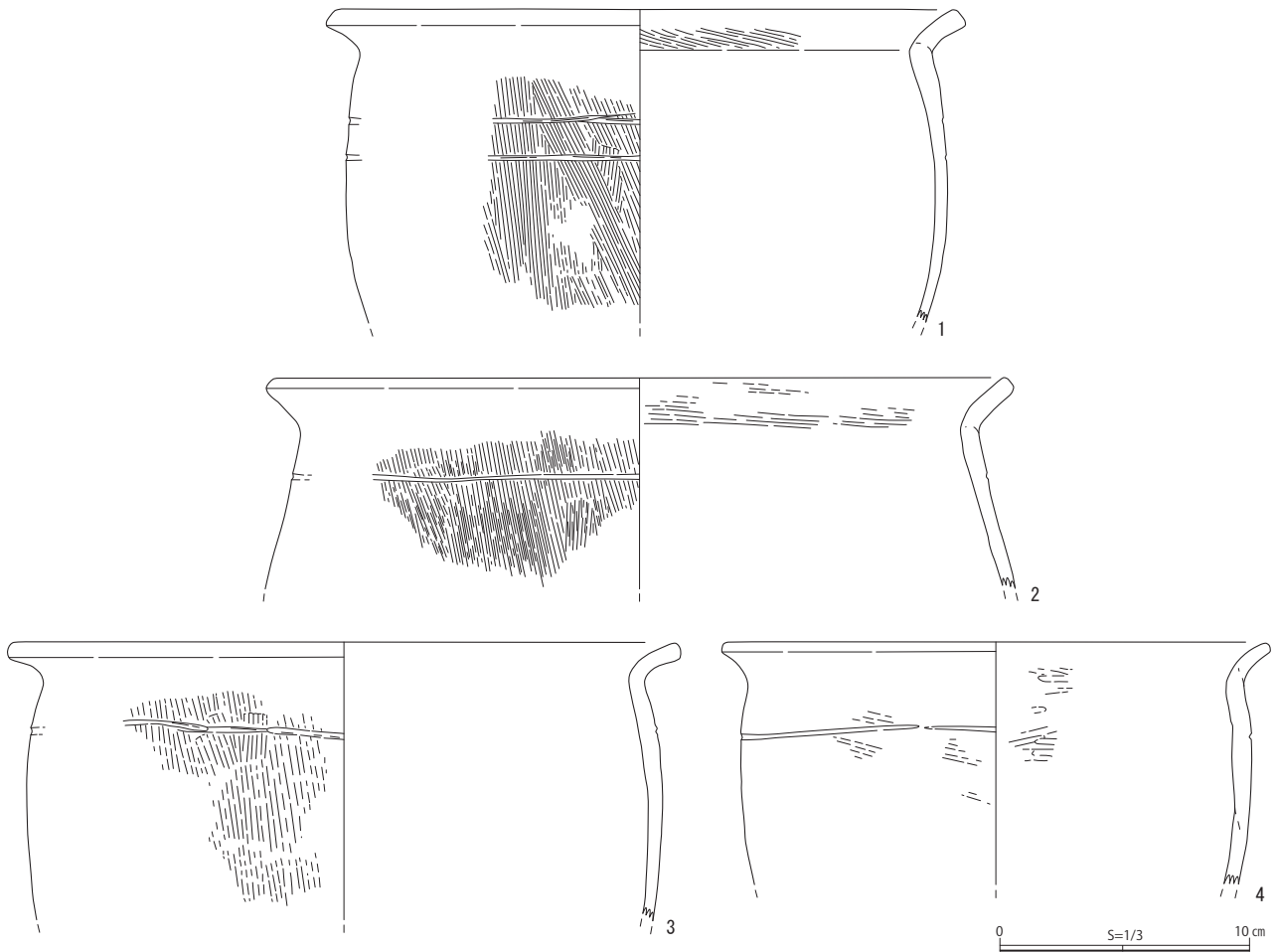
『日本農耕文化の生成』（鏡山ほか1961）における分類単位との関係を示すと、「城ノ越Ⅰ式土器」と「城ノ越Ⅱ式土器」に該当するものはなく、「城ノ越Ⅲ式土器」が本稿BⅠ類・BⅡ類とBⅢ類の一部、「城ノ越Ⅳ式土器」がBⅢ類の一部とBⅣ類・BⅤ類に概ね相当する。先学の諸成果を踏まえると（田崎1985；武末1987・2011；武末・上田2006；石田2015など）、BⅠ類は板付Ⅱc式土器～城ノ越式土器に、BⅡ類は城ノ越式土器に、BⅢ類は須玖Ⅰ式土器に、BⅣ類は須玖Ⅰ式～Ⅱ式土器に、B

V類は須玖Ⅱ式土器に該当すると考えられる。

iii) 甕A類・甕B類の器面調整

甕A類と甕B類の各分類単位における、部位ごとの器面調整のあり方を示したものが第19・20図である。まず大局的にみて、甕A類と甕B類における器面調整のあり方に差異が認められる。甕A類はどの部位においても器面調整にバリエーションが認められるのに対して、甕B類は相対的にバリエーションが少ない。

詳細に見ると、甕A類の中でも、特にAⅡ類やAⅢa類、AⅢb類の器面調整にバリエーションが多く認められる。その一方で、AⅢc類、AⅢd類、AⅣ類、AⅤ類はバリエーションが少なく、甕B類における器面調整



第10図 甕A類：A II c類

のあり方と比較的類似している。

A I類もバリエーションが少ないが、内面の胴部上半が横刷毛で調整されるなど、他の分類単位とやや異なる傾向もみられる。

以上のような器面調整の変異は、時間差や系統差を反映している可能性が高い。しかし、その位置づけを明確にするためには、今後さらなる検討が必要であろう。本稿では基礎データの提示に留めておきたい。

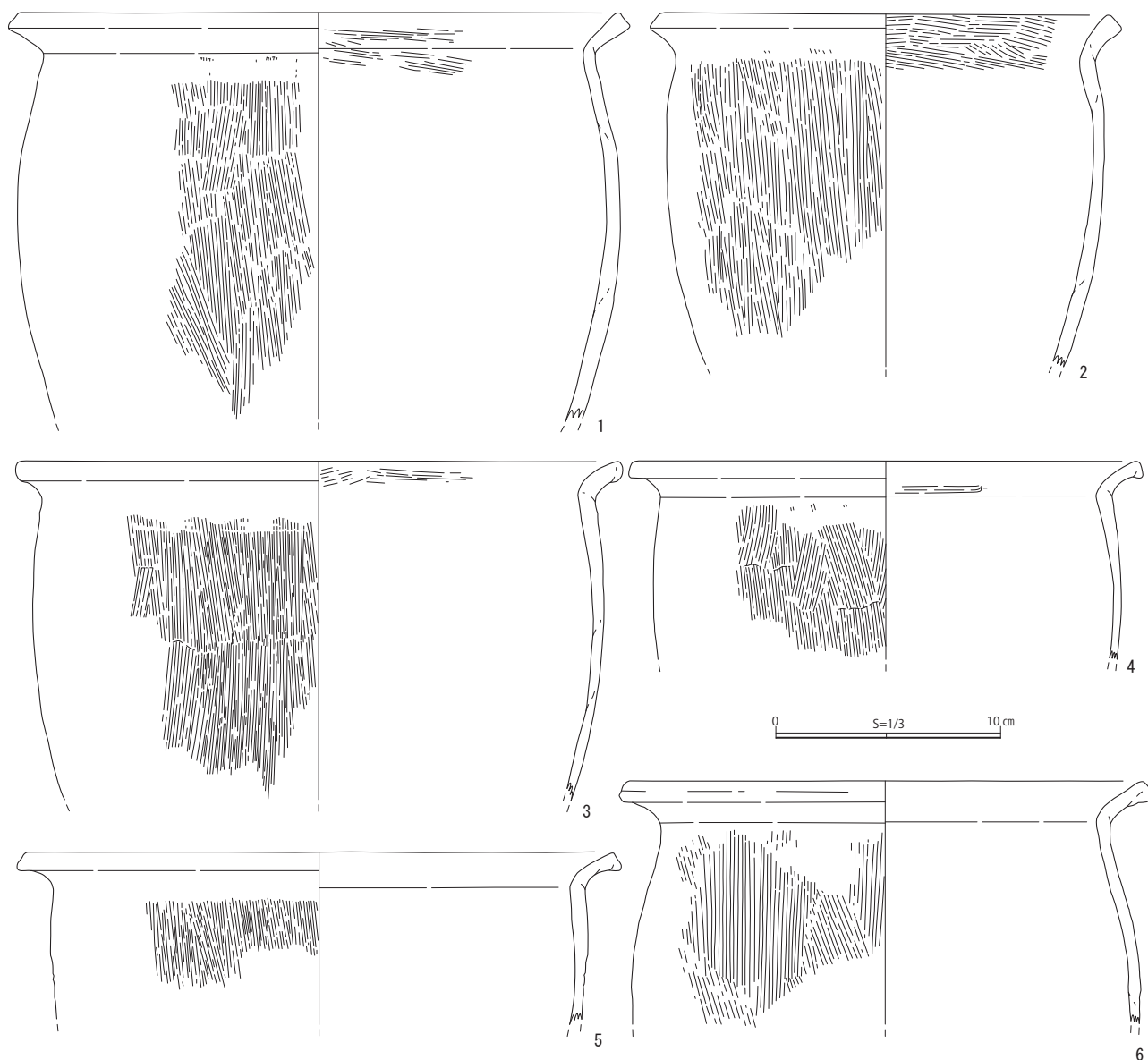
iv) 甕A類・甕B類の出土状況

甕A類と甕B類の各分類単位の人工層位別出土状況を示したものが第21図である。幸いなことに、各土器片には出土層位の情報が注記されているため、どの層から出土したものか特定することができる。第21図は、横軸に各分類単位、縦軸に人工層位をとり、上から下に行くほど層が古くなるように配置した。

縦軸の「A 5」や「B 12下」などが、人工層位である

ことには注意が必要である。人工層位は、一定の深さごとに面的に掘り下げていくため、必ずしも第2・3図に示された層位と対応しているとは限らない。特に第2・3図のように傾斜して堆積している場合は尚更である。例えば、第3図のB区において、上から1.5m付近を面的に掘り下げたときに出土した遺物のある名称を付して取り上げていたとしても、遺物出土平面図などが存在しない限り、「城ノ越 II Suku」・「混土貝層 Suku, Ongagawa 共存」・「城ノ越 I Ongagawa」のどの層から出土した遺物なのかを特定することはできない。よって、第21図に示されている出土層位の上下関係を、そのまま堆積時期の新旧に対応させることはできないことは明らかである。残された情報を最大限に抽出したものが第21図であるものの、その読み取りは慎重を期す必要がある。

以上のような問題点を踏まえた上で第21図を見ると、B区では、新相と考えた甕AIV類・A V類は他と比較して上層から出土する傾向や、P区でも、新相と考えた甕



第11図 甕A類：A III a類

B III類・B IV類が上層から出土する傾向が窺えないわけではない。また、P区の「P 6」以下では甕B類が出土せず、甕B類は甕A類に後出する可能性も想起される。

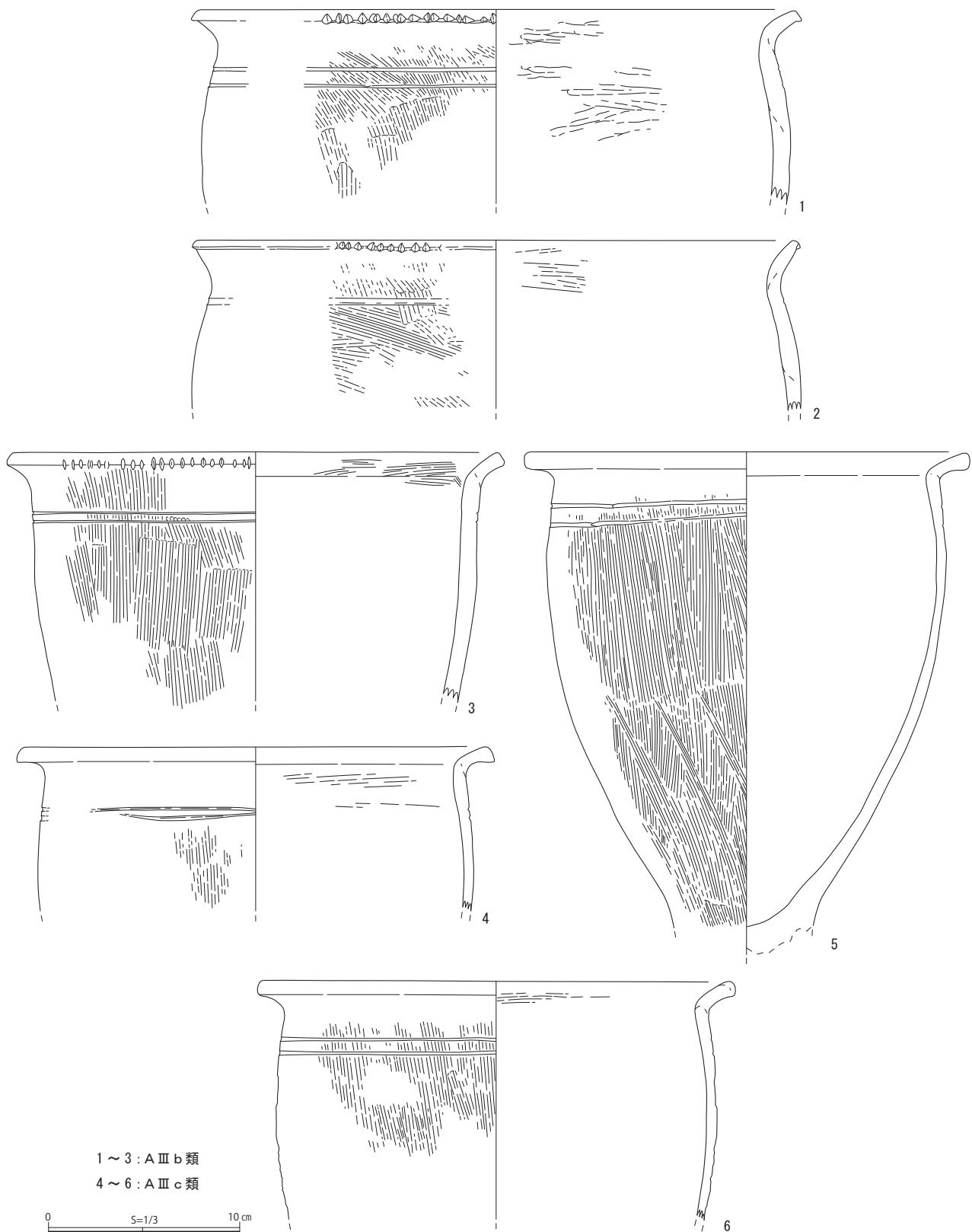
しかし、甕A I類・A II類・A III類などは層の上下に関係なく出土している状況が窺える。また、B区の最下層（「B13」）からは甕B III類（須玖 I 式土器）が、P区の「P 8」からは甕A IV a類（須玖 I 式～II 式）が出土しており、型式学的検討で想定した土器の新旧と、出土レベルの上下関係とが対応しない事例も確認できる。

『日本農耕文化の生成』では、第2次調査で確認した層位状況が、土器の新旧と明確に対応することが示されており、それをもとに「城ノ越式土器」の設定がなされて

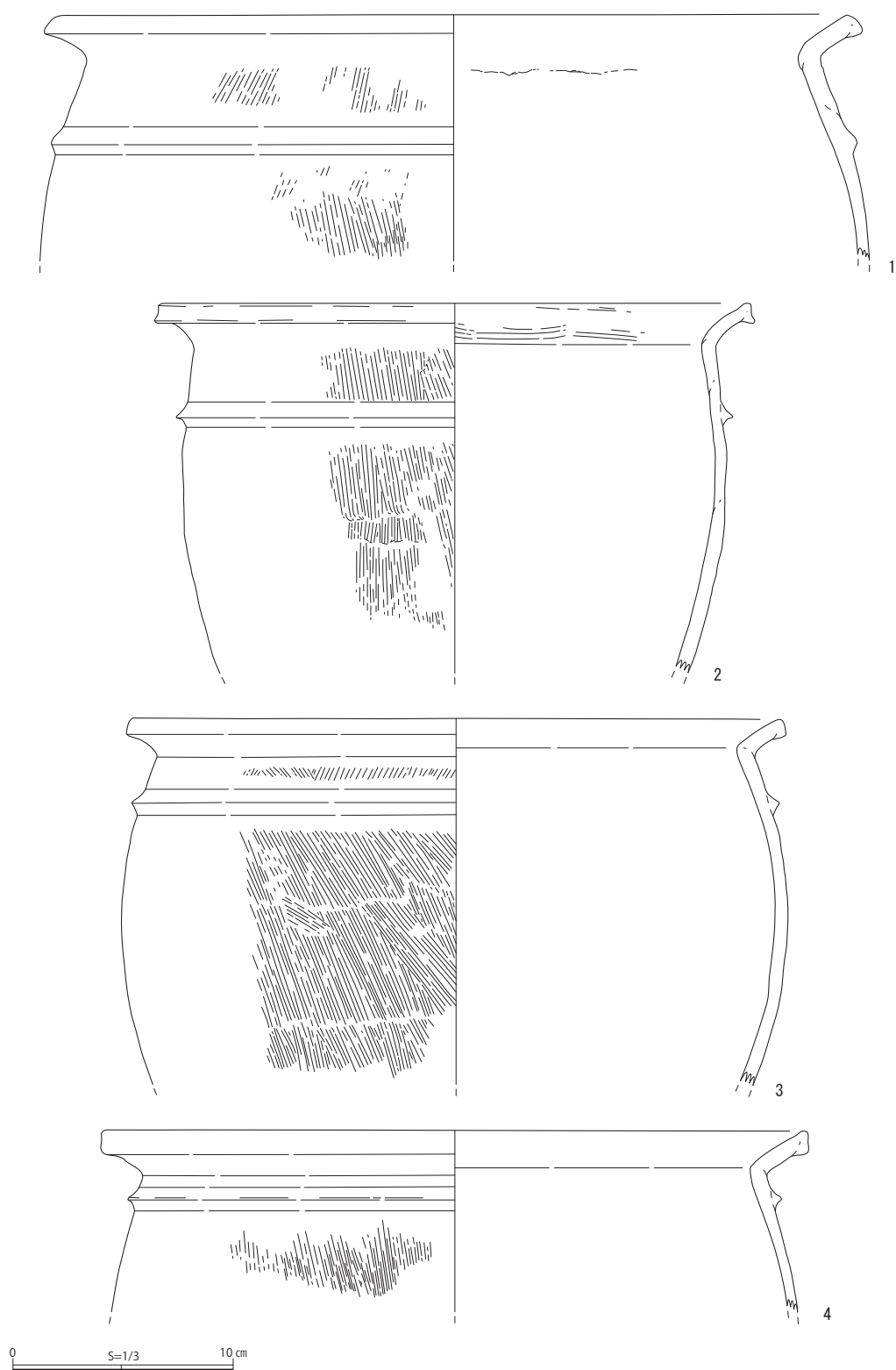
いる（鏡山ほか1961）。第1次調査に関しても、第2・3図の層位図を見る限り、各層に「城ノ越 I Ongagawa」・「城ノ越 II Suku」・「城ノ越 III Isaza」と記載され、層位状況が土器の新旧と対応するように示されている。しかし、少なくとも第1次調査に関して言えば、後世に残された情報に基づいて判断した場合（第21図）、層位状況と土器の新旧が明確に対応するようなあり方を見出すことは難しいと言わざるを得ない。

v) 甕形土器の底部

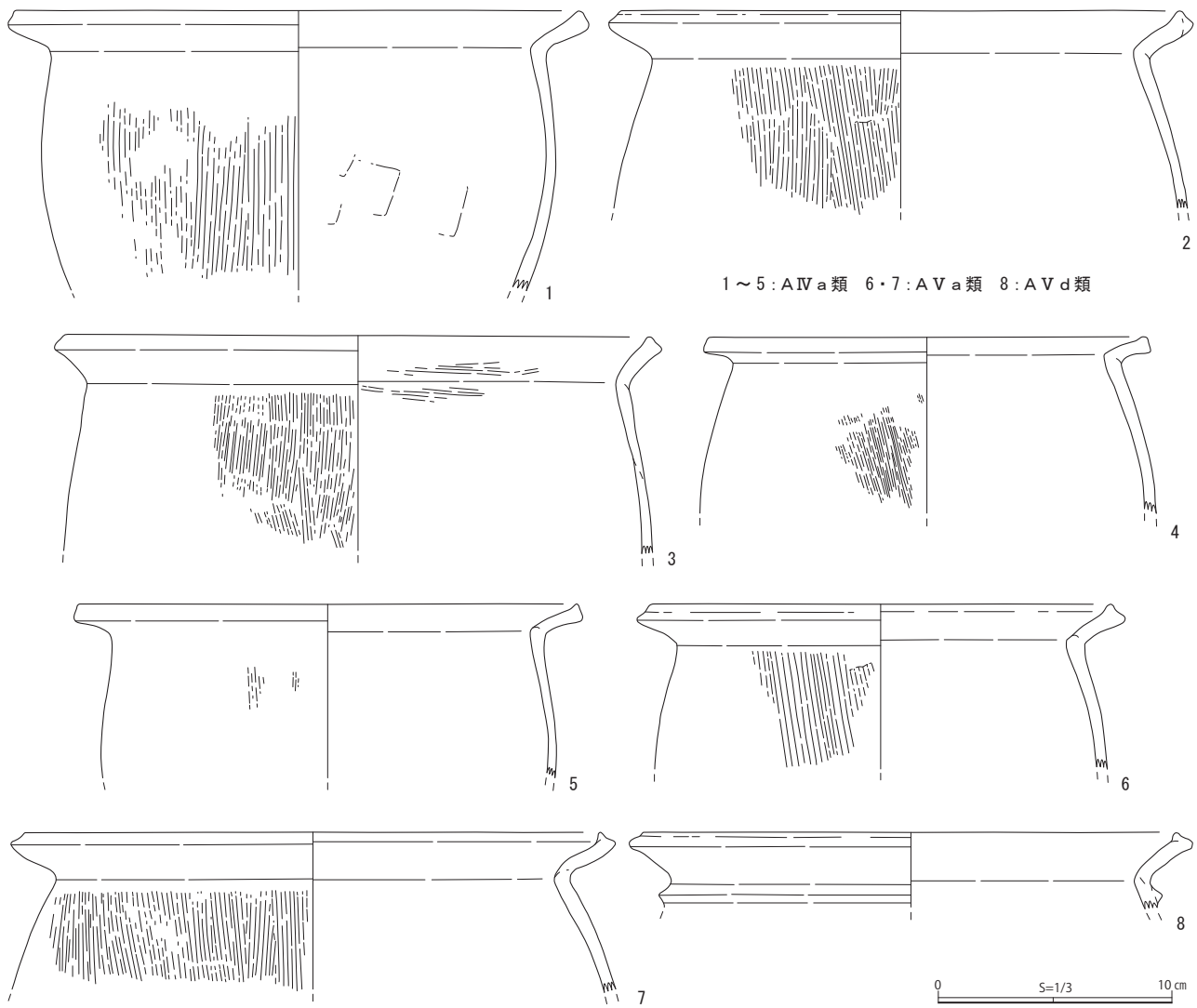
弥生時代前期後半から中期における土器の変化を考える場合、これまで底部形態の変異が注目されてきた。す



第12図 甕A類：A III b類・A III c類



第13図 甕A類：AⅢd類



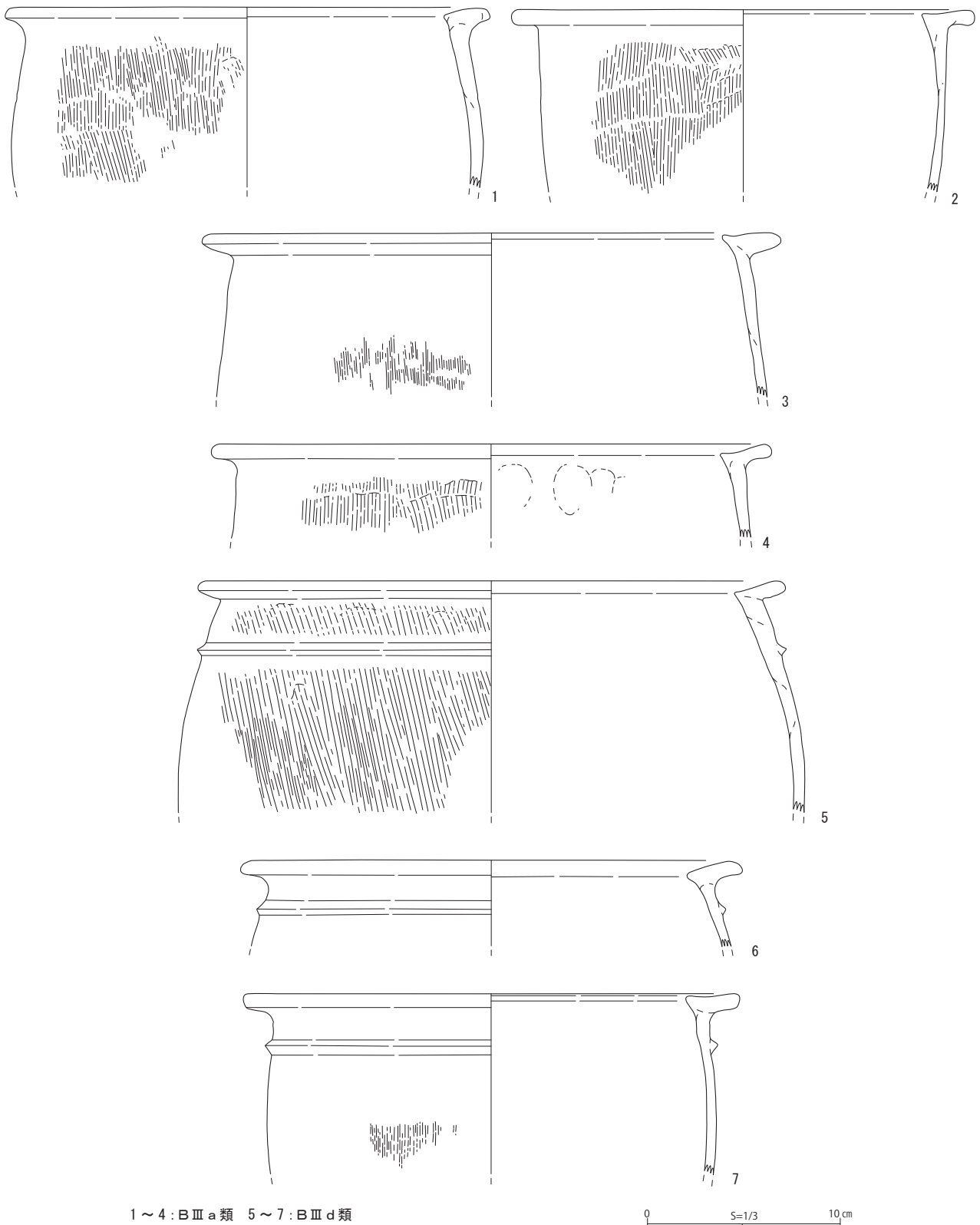
第14図 甕A類：AIVa類・AVa類・AVd類



第15図 甕B類 口縁部形態の変異



第16図 甕B類 : B I a 類・B II a 類・B II c 類



1 ~ 4 : B III a 類 5 ~ 7 : B III d 類

0 S=1/3 10 cm

第17図 甕B類：B III a 類・B III d 類



第18図 甕B類：BⅣa類・BⅣd類・BⅤa類・BⅤd類

《外面 口縁部》

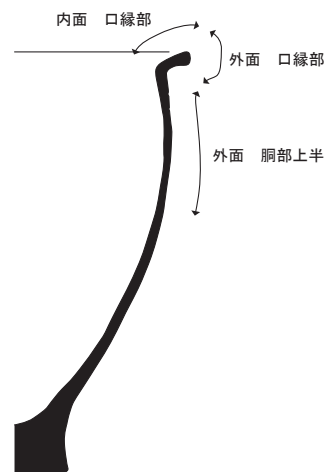
	横 磨	横 刷 毛	縦 刷 毛	斜 刷 毛	横 撫	総計
甕AⅠa類	1				1	2
甕AⅠb類					2	2
甕AⅡa類	1	2	1	3	28	35
甕AⅡb類	1		1		11	13
甕AⅡc類	1				9	10
甕AⅢa類					34	34
甕AⅢb類			2		7	9
甕AⅢc類					5	5
甕AⅢd類					5	5
甕AⅣa類					17	17
甕AⅤa類					4	4
甕AⅤd類					1	1
甕BⅠa類					8	8
甕BⅡa類					4	4
甕BⅡc類					2	2
甕BⅢa類					5	5
甕BⅢd類					3	3
甕BⅣa類					8	8
甕BⅣd類					1	1
甕BⅤa類					2	2
甕BⅤd類					2	2
総計	4	2	4	3	159	172

《内面 口縁部》

	横 磨	磨	粗 横 磨	粗 磨	横 刷 毛	板 横 撫	横 撫	撫	総計
甕AⅠa類	2								2
甕AⅠb類							2		2
甕AⅡa類	1	1			4		29		35
甕AⅡb類	4		2	1	1		5		13
甕AⅡc類	1		1		1		7		10
甕AⅢa類	1	1	1		2	3	25		33
甕AⅢb類	5	1	1				2		9
甕AⅢc類							5		5
甕AⅢd類							5		5
甕AⅣa類	1						17		18
甕AⅤa類							4		4
甕AⅤd類							1		1
甕BⅠa類	3						4	1	8
甕BⅡa類							3	1	4
甕BⅡc類							2		2
甕BⅢa類							5		5
甕BⅢd類							3		3
甕BⅣa類							8		8
甕BⅣd類							1		1
甕BⅤa類							2		2
甕BⅤd類							2		2
総計	18	3	5	1	8	3	132	2	172

《外面 胴部上半》

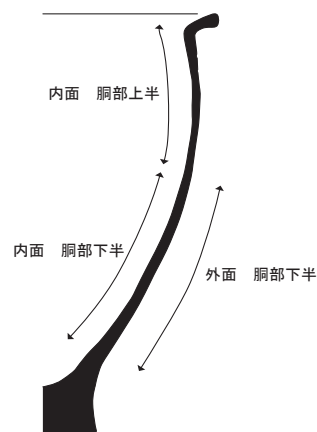
	横 磨	縦 磨	磨	横 刷 毛	縦 刷 毛	斜 刷 毛	横 撫	縦 撫	撫	総計
甕AⅠa類					1	1				2
甕AⅠb類					1	1				2
甕AⅡa類		1		1	27	2	2		1	34
甕AⅡb類				1	8	1				10
甕AⅡc類					6				3	9
甕AⅢa類				1	30		1		1	33
甕AⅢb類				1	5		1			7
甕AⅢc類					3		1	1		5
甕AⅢd類					5					5
甕AⅣa類			1		10		3		1	15
甕AⅤa類					2					2
甕BⅠa類					8					8
甕BⅡa類					3		1			4
甕BⅡc類					2					2
甕BⅢa類					4		1			5
甕BⅢd類					1		2			3
甕BⅣa類					3		4			7
甕BⅣd類							1			1
甕BⅤa類							2			2
甕BⅤd類	1						1			2
総計	1	1	1	4	119	5	20	1	6	158



第19図 甕A類・甕B類 器面調整①

《内面 胴部上半》

	横 磨	縦 磨	磨	粗 横 磨	粗 磨	横 刷 毛	板 横 磨	横 撫	縦 撫	斜 撫	撫	総計
甕AⅠa類						1					2	3
甕AⅠb類						1					1	2
甕AⅡa類	2				2		1	5		4	19	33
甕AⅡb類		2		1	2			3	1	1		10
甕AⅡc類				1				3		1	4	9
甕AⅢa類		1	1		1		1	14		1	12	31
甕AⅢb類	1	1		1				2			2	7
甕AⅢc類									1	1	3	5
甕AⅢd類								3			2	5
甕AⅣa類	1							4		2	10	17
甕AⅤa類								1			1	2
甕BⅠa類	2							1		1	3	7
甕BⅡa類								1			3	4
甕BⅡc類								1			1	2
甕BⅢa類										1	4	5
甕BⅢd類											3	3
甕BⅣa類					1			1		2	3	7
甕BⅣd類											1	1
甕BⅤa類								2				2
甕BⅤd類								2				2
総計	6	4	1	3	6	2	2	43	2	14	74	157



《外面 胴部下半》

	横 刷 毛	縦 刷 毛	横 撫	撫	総計
甕AⅠa類		1			1
甕AⅡa類	1	7	1		9
甕AⅡb類		2			2
甕AⅡc類		1		1	2
甕AⅢa類		6			6
甕AⅢb類		1			1
甕AⅢc類		3			3
甕AⅢd類		2			2
甕AⅣa類		2			2
甕BⅡa類		1			1
甕BⅢa類		1			1
甕BⅢd類		1			1
甕BⅣa類		1	2		3
甕BⅣd類		1			1
総計	1	30	3	1	35

《内面 胴部下半》

	横 磨	粗 磨	斜 撫	縦 撫	撫	総計
甕AⅠa類					1	1
甕AⅡa類	1				6	7
甕AⅡb類			1		1	2
甕AⅡc類		1			1	2
甕AⅢa類			1	2	3	6
甕AⅢb類					1	1
甕AⅢc類					3	3
甕AⅢd類				1	1	2
甕AⅣa類			2			2
甕BⅡa類					1	1
甕BⅢa類			1			1
甕BⅣa類			1		2	3
甕BⅣd類				1		1
総計	1	1	6	4	20	32

第20図 甕A類・甕B類 器面調整②

なわち、裾部が張り出す厚い凹底から、裾部の張り出しが弱く薄い平底へ、という変化の想定である（田崎1985など）。

第1次調査出土資料にもある程度まとまった量の底部資料が存在している⁵。それらは以下のような形態的バリエーションを有している。

〔底部裾部形態〕 X：裾部が張り出す，Y：裾部が張り出さない

〔底面形態〕 a：凹底，b：平底

〔底部厚み〕 厚：厚底（厚さ3cm以上），薄：薄底（厚さ3cm未満）

これら属性の組み合わせで分類した結果，X a 厚（13点），X a 薄（12点），X b 薄（4点），Y a 厚（1点），Y a 薄（6点），Y b 薄（9点），の全部で6つの分類単位を抽出した（第22図）。裾部が強く張り出して踏ん張った形をなす厚い凹底（Ex. 田崎1985の甕形土器A 1やB 1など）は，第1次調査出土資料の中には確認できなかった。

第23図は，底部の各分類単位の人工層位別出土状況を示したものである。第21図で指摘したように，その読み取りは慎重を期す必要があるものの，裾部が張り出す厚い凹底（X a 厚）が下層から出土し，裾部の張り出しが

臺 A														臺 B								總計					
I a 類	I b 類	II a 類	II b 類	II c 類	III a 類	III b 類	III c 類	III d 類	IV a 類	V a 類	V d 類	I a 類	II a 類	II c 類	III a 類	III d 類	IV a 類	V a 類	V d 類								
A 區																											
A5									1										1	1							
A6																				1							
A9			1							1	1									3							
A10										1										1							
AB11					1								2			1	2	1	1	8							
B 區																											
B2	1								3											4							
B3									2							1				3							
B9			2			7			4	1							1			15							
B10			2			5		1	1	1				1	1					12							
B11			3			2		1	4						1		3	1		15							
B11下			1										1							2							
B11/B12					1	3		1		2										7							
B12			2			1			1						1					5							
B12下			4			4	1		1						1					11							
B13			4	1		2	2	1				3				1				14							
P 區																											
P1			3		1	1	1							1		1				8							
P2	1		4			1		1	1			1		1		1				11							
P3						1														1							
P4			2	3	1	1	1						1							9							
P5	1	1	3	3	1	1	2	1				4								17							
P6			2	4			1													7							
P7				1			1													2							
P8										1										1							
P9				1																1							
總計	3	1	33	13	5	29	9	5	4	18	4	1	8	4	2	5	3	8	2	2	159						

第21図 甕A類・甕B類 出土状況

弱く薄い平底（Y b 薄）が上層から出土する，といった傾向を看取することはできない．甕A類・甕B類と同様，底部においても層位状況と土器の新旧が明確に対応するようなあり方を見出すことは難しい．

（2）壺形土器

甕形土器に比べると数量的には少ないものの，壺型土器もある程度まとまった量が出土している．ただし，壺型土器は破片資料が多く，全体の器形を確認できるものがほとんど存在しない．そのため，形態的特徴にバリエーションが見られ，かつ，資料数も確保できる口縁部資料を対象として，その形状によって分類することにした．以下の通り，口縁部の成形手法によってA類・B類・C類に大別し，C類に関してはその形態的特徴によって3つに細別した（第24図）．

A類…口縁部外面に粘土を貼付けて肥厚させる．

B類…素口縁で粘土の貼付けを行わない．

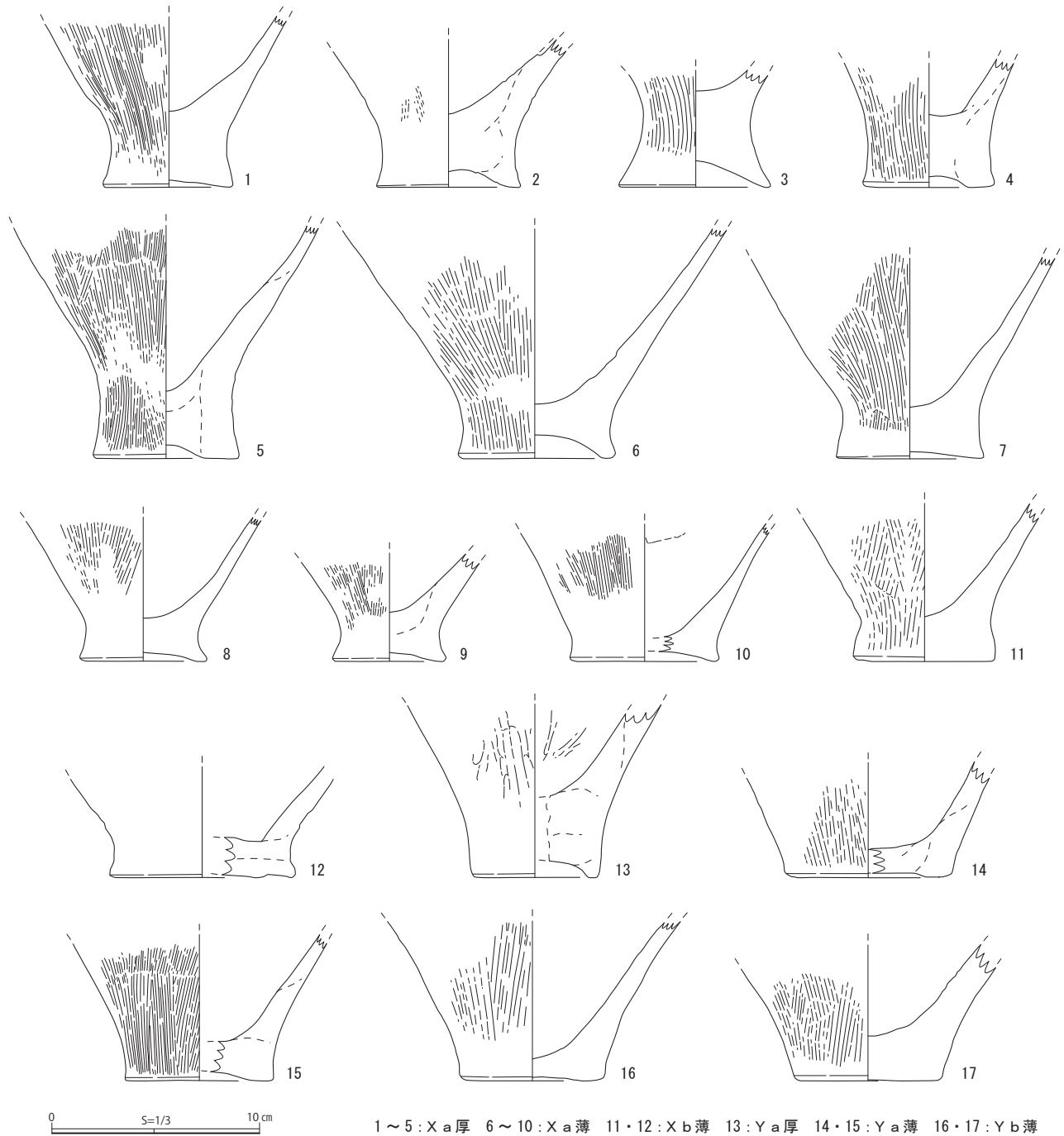
C I 類…口縁部上面に粘土を貼付けて肥厚させる．

C II 類…口縁部上面に粘土を貼付けて肥厚させ，内側を突出させる．

C III 類…「T」字形をなす．

第25・26図は各分類単位の代表例を示したものである．A類は第25図1・2に示した2点のみ，いずれも口縁部が強く外反し，口縁部外面の肥厚部下端に刷毛目調整の痕跡を残す．B類は16点確認している．頸部の長さや外反の度合い，頸胴部境界の突帯の有無，口縁端部形状などにバリエーションが存在しており（第25図3～10），素口縁を基準としてまとめて分類したものの，その中に時空間的変異を内包している可能性が高い．C I 類（5点），C II 類（5点），C III 類（1点）として分類したものについても，B類と同様，頸部の長さや外反の度合いなどにバリエーションが存在している．C III 類は1点のみ出土しており（第26図11），口縁部に対する頸部の傾きが急であることから，壺ではなく高杯の口縁部である可能性も否定できない．

『日本農耕文化の生成』（鏡山ほか1961）における分類



第22図 甕形土器 底部

単位との関係を示すと、「城ノ越Ⅰ式土器」と「城ノ越Ⅱ式土器」が本稿のA類とB類の一部、「城ノ越Ⅲ式土器」が本稿のB類の一部とCⅠ類・CⅡ類、「城ノ越Ⅳ式土器」が本稿のCⅢ類に概ね該当しよう。先学の諸成果を踏まえると（田崎1985；武末1987・2011；武末・上田2006；石田2015など），A類は板付Ⅱa式～Ⅱb式土器に，B類は板付Ⅱc式土器～須玖式土器に，CⅠ類は城ノ越式土器に，CⅡ類は須玖Ⅰ式土器に，CⅢ類は須玖Ⅱ式土器に該当すると考えられる。

		底部						総計
		X	X	X	Y	Y	Y	
		a	a	b	a	a	b	
		厚	薄	薄	厚	薄	薄	
A 区								
	A5							0
	A6							0
	A9							0
	A10							0
	AB11	1						1
B 区								
	B2							0
	B3		1				1	2
	B9		1					1
	B10	1						1
	B11	2	4	2				8
	B11下							0
	B11/B12	1						1
	B12	2	1			1		4
	B12下	1	2			1	1	5
	B13				1	1		2
P 区								
	P1	1	1					2
	P2	3	1				1	5
	P3							0
	P4	1				2	1	4
	P5		1	1			4	6
	P6			1		1	1	3
	P7							0
	P8							0
	P9							0
総計		13	12	4	1	6	9	45

第23図 甕形土器底部 出土状況

第27図は，壺の各分類単位の人工層位別出土状況を示したものである。点数は少ないものの，古手と考えたA類がB区・P区ともに最下層から出土しており，新しく位置づけたC類はB区・P区ともに下層からは出土していないことが把握でき，想定した土器の新旧と層位的出土状況に矛盾はない。しかし，当該データが人工層位にもとづいていることの問題点は上述の通りであり，第27図の読み取りも参考程度にとどめておく必要がある。

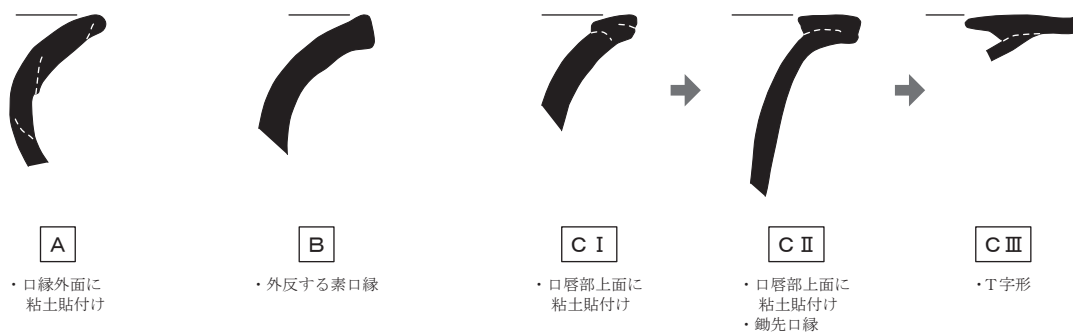
第28・29図には，分類単位としてまとめることができなかったその他の壺形土器資料を示した。第28図1・3は，口縁部あるいは頸部に貝殻腹縁押捺文が施されている。2は長頸壺の口縁部片と考えられ，口縁部から少し下がった位置に突帯を巡らせている。4は短頸壺の口縁部片である。

第28図5～18，第29図には頸部片・胴部片をまとめた。頸部に沈線や貝殻腹縁押捺で文様を描くものについては，小片であっても全て図化して掲載している（第28図8～18，第29図1～10）。有軸羽状文や無軸羽状文，弧線文などもモチーフが認められる。また，『日本農耕文化の生成』（鏡山ほか1961）の報告では出土していないとされていた木葉文を施すものも確認できる（第29図10）。

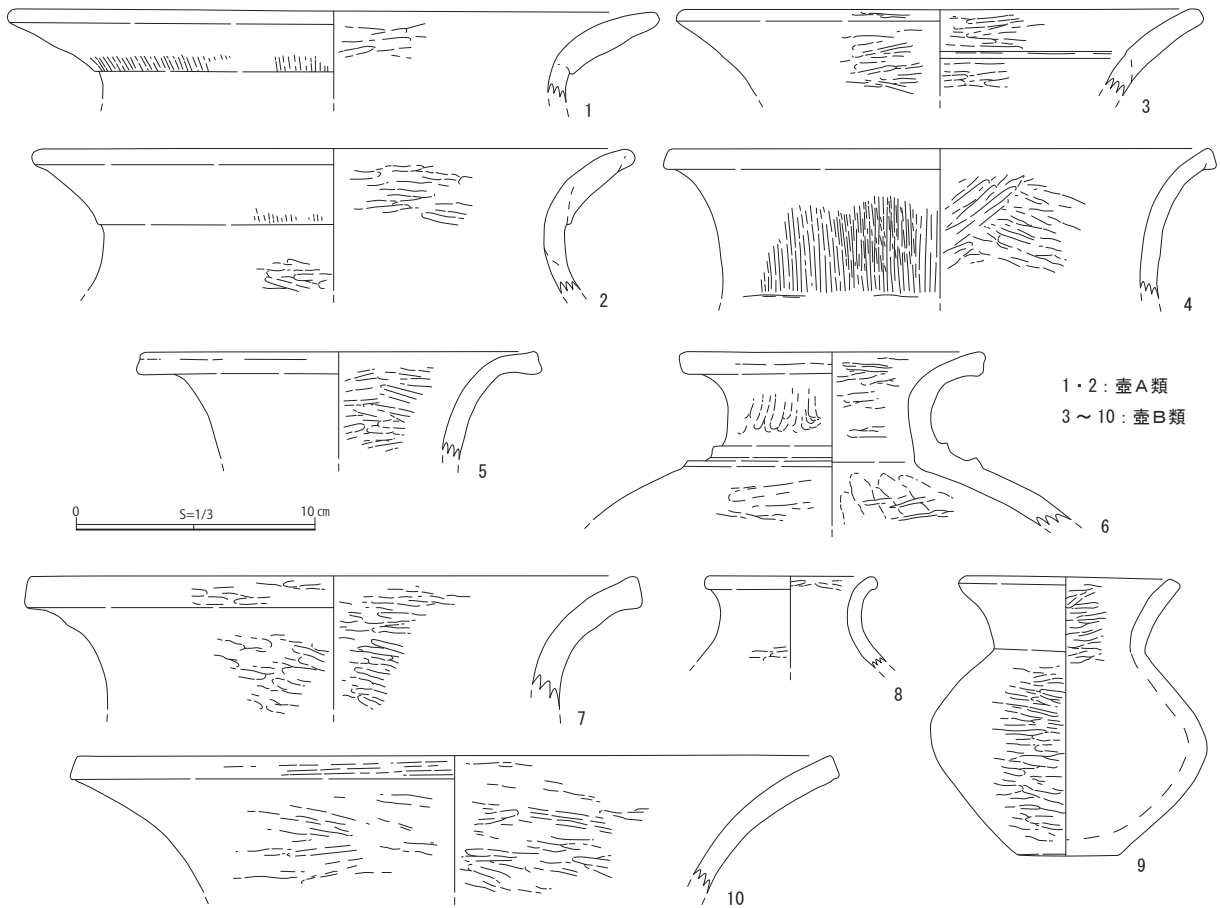
胴部に突帯を施すものについて，第29図に代表的なものを示した。突帯は1～2条施され，胴部最大径に配されるものが多い。断面三角形のものが多く（第29図11～13），断面「M」字形を呈するものも一定数確認できる（第29図14）。

（3）その他の器種

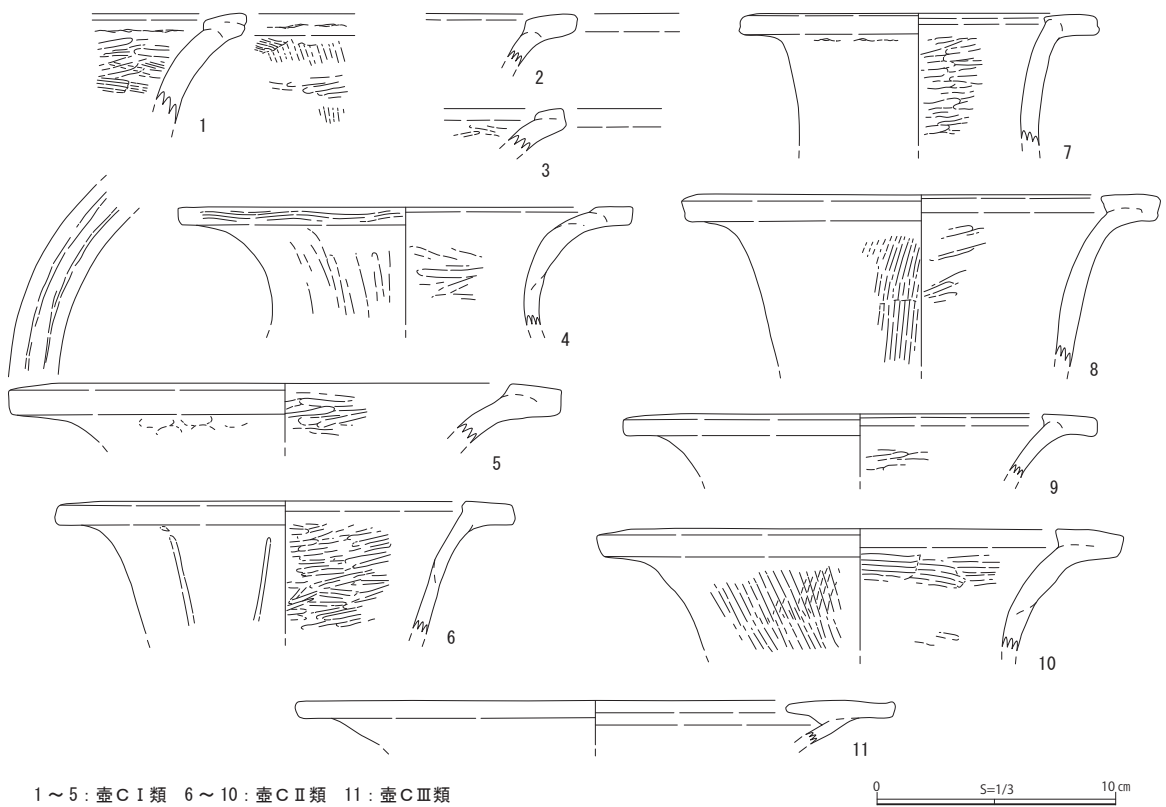
甕形土器・壺形土器以外の器種も少量ながら出土している（第30図）。1は，ボウル形の鉢形土器で，口縁端部を撫でてきれいに面取りしている。2は，「く」字形に



第24図 壺形土器 口縁部形態の変異



第25図 壺形土器：A類・B類



第26図 壺形土器：C I類・C II類・C III類

		壺					總計
		A 類	B 類	C I 類	C II 類	C III 類	
A 区							
	A5						0
	A6		1				1
	A9						0
	A10						0
	AB11						0
B 区							
	B2						0
	B3		2				2
	B9						0
	B10		1				1
	B11					1	1
	B11下						0
	B11/B12						0
	B12						0
	B12下		1				1
	B13	1	3	1			5
P 区							
	P1		2	2	3		7
	P2		1		1		2
	P3						0
	P4						0
	P5		4	2			6
	P6		1				1
	P7						0
	P8						0
	P9	1					1
總計		2	16	5	4	1	28

第27図 壺形土器 出土状況

口縁部が屈曲して、甕AⅡ類に形態は類似しているものの、口径に対して器高が小さいことから鉢形と判断した。器壁外面は横方向の磨き調整がなされている。3は、口縁部と胴部下半にそれぞれ3条ずつ突帯が施されている。器壁外面の磨滅が著しい。胴部下半に施される3条の突帯も、本来は断面「M」字形だったと推察されるが、磨滅により断面台形状を呈するようになったと考えられる。外面に赤色顔料が塗布された痕跡を確認できる。4は、高坏脚部である。5は、小片のため判断が難しいが、高坏の口縁部片の可能性はある。6～8は、蓋と考えられる。

4. おわりに：城ノ越貝塚第1次調査資料の位置づけ

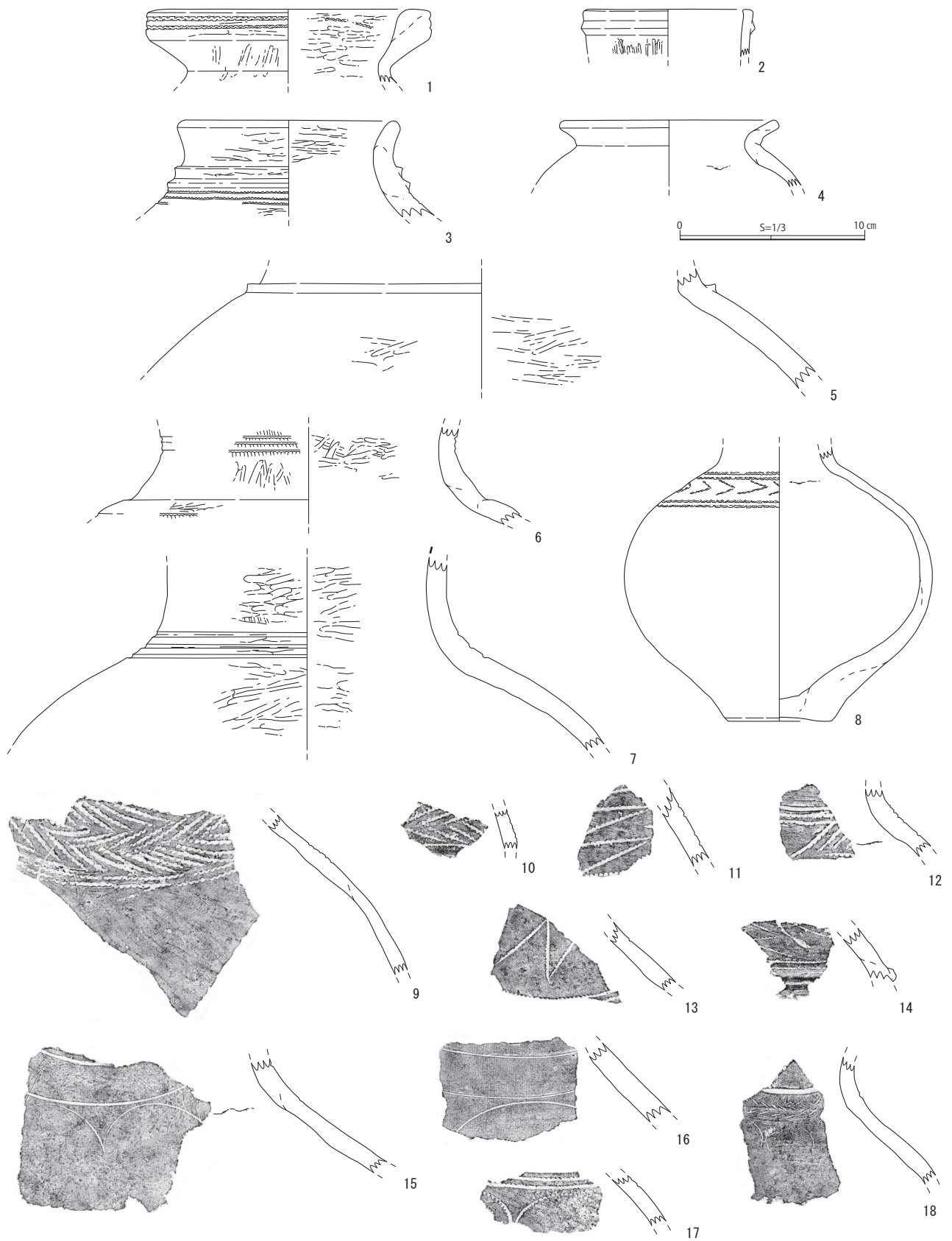
本稿では、これまで詳細が報告されていなかった、昭和27（1952）年に実施された城ノ越貝塚第1次調査について、その調査概要と出土遺物の報告を行った。

出土した弥生土器を検討した結果、弥生時代前期後半の板付Ⅱa式土器～中期後半の須玖Ⅱ式土器が出土しており、特に中期初頭の城ノ越式土器と中期前半の須玖Ⅰ式土器が主体をなしていることがわかった。また、『日本農耕文化の生成』（鏡山ほか1961）で報告されている第2次調査出土資料を見ると、須玖Ⅱ式土器（＝「城ノ越Ⅳ式土器」）が一定量出土していることが窺えるが、本稿で報告した第1次調査出土資料では当該期土器の出土はかなり少ない印象を受ける。第2次調査では、第1次調査区を広げる形で調査区を設定しており（杉原編1960）、両者に見られる土器の差異が何に起因するかは不明である。

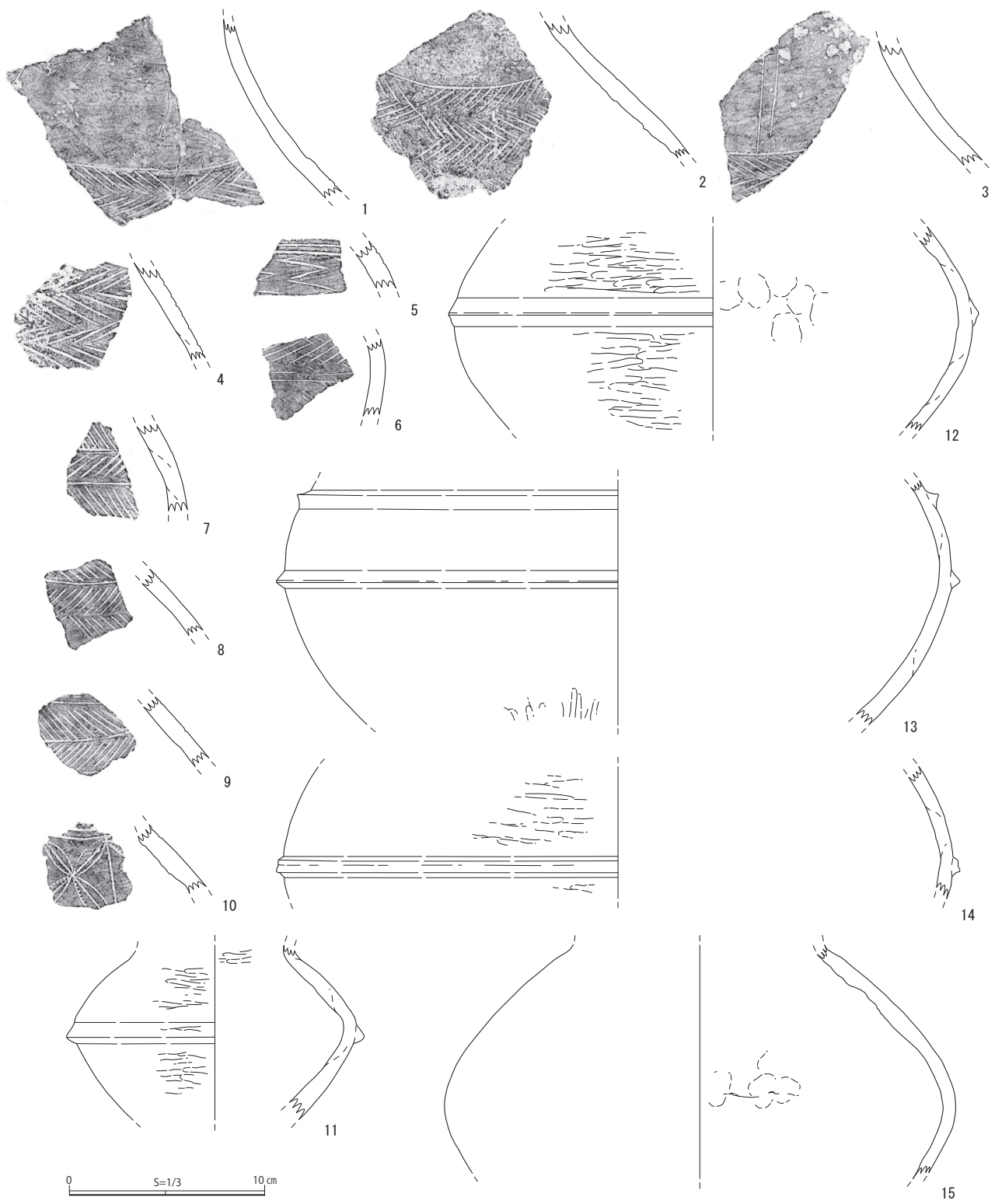
『日本農耕文化の生成』では、第2次調査で確認した層位状況が、土器の新旧と明確に対応することが示されている（鏡山ほか1961）。しかし、今回、第1次調査における層位状況と出土土器について検討した結果、人工層位ごとの出土土器の検討ではあったものの、層位状況と土器の新旧が明確に対応するようなあり方を見出すことは困難であった⁶。第21・23・27図に示したデータに対して、どの程度重視して評価するか難しいところではあるが、少なくとも第1次調査、そして、第2次調査についても、いま一度、土器の層位的出土状況に関しては慎重に検討した上で、再考する必要があると考える。

今後の課題は山積している。本稿で行った土器の分類は、あくまでも九州大学総合研究博物館に収蔵されている第1次調査出土資料のみを対象としたものであり、各分類単位抽出の妥当性については、今後、他の遺跡から出土した土器の検討を行った上で判断していかねばならない。

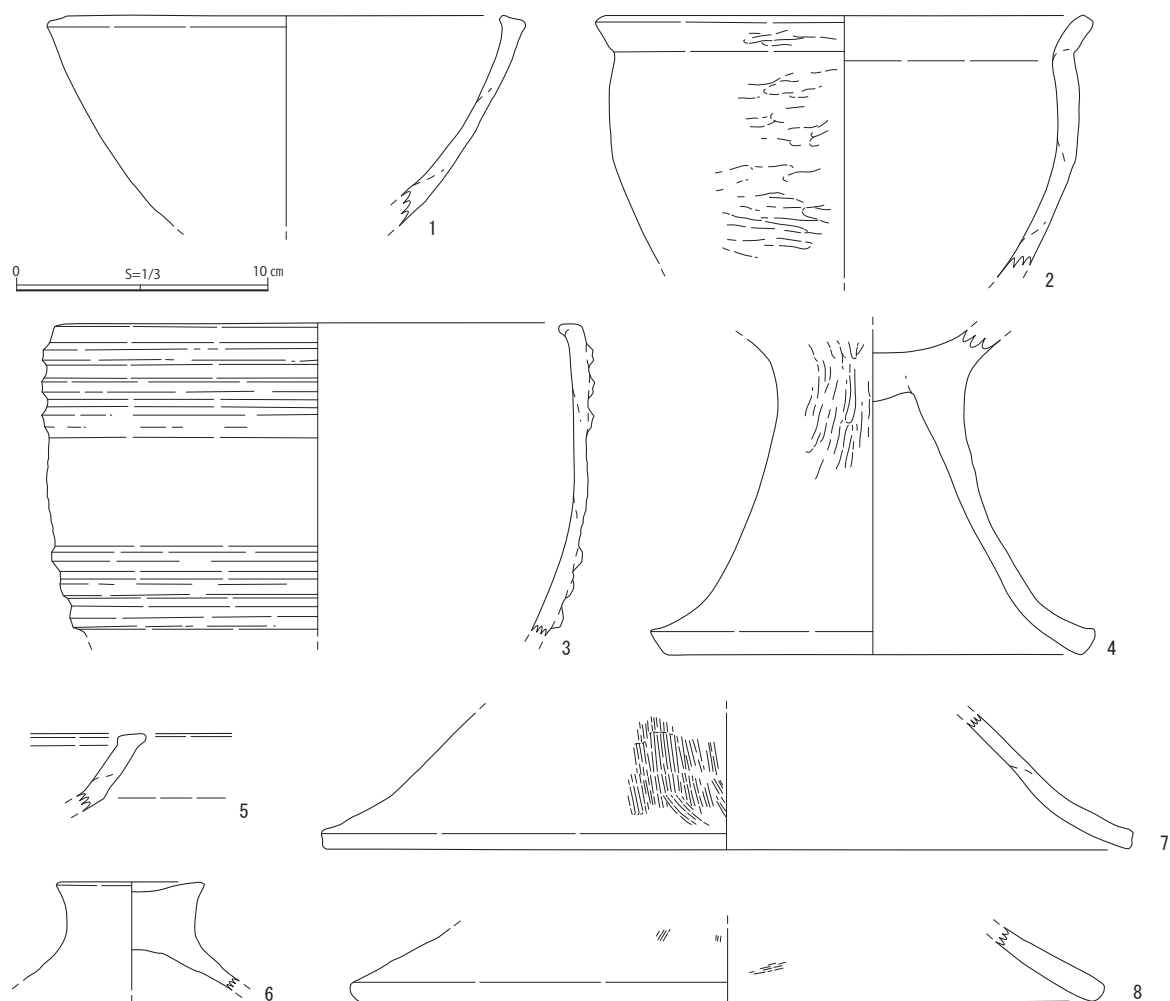
また、今回報告できなかった弥生時代の貝資料や、古墳時代以降の遺物についても、今後整理・報告する必要がある。特に貝資料については、弥生時代前期後半～中期にかけて当該地に貝塚が形成された理由を解明する上で重要な資料と考えられる。これまで、貝塚から出土する貝類・魚類などの生態学的情報を検討することで、当時の気候・環境変動の復元研究がなされてきた。齋藤穂氏は、玄界灘沿岸地域の弥生時代貝塚を検討した結果、板付Ⅱ式期に海水準の上昇を伴う温暖化が生じており、それは、伊勢・三河湾沿岸や東関東地域などの状況と連動した汎列島の現象として捉えるべきであるという指摘を行っている（齋藤2009）。



第28図 壺形土器：その他①



第29図 壺形土器：その他②



第30図 その他の器種

一方、田崎博之氏は、弥生時代前期末～中期の福岡平野において、平野沖積面での土砂の堆積が進むことを指摘し、こうした沖積平野の土地環境の変化は、花粉分析成果から指摘されている同時期の気候冷涼化との関係を推察している（田崎1998）。

弥生時代前期後半から中期前半期は、様々な物質文化において画期が見いだせる時期であることが指摘されており（岩永1991・1994；下條1975；高倉1986；武末2011；田中2000；常松2011；溝口1998・2000；宮本2020，森2018；森1968など），こうした社会的・文化的変動の実態についてより理解を深めていくためにも，当該期における気候・環境変動の復元は必要不可欠な研究課題の一つであると考え，今後そうした研究課題を解決していく上で，城ノ越貝塚は重要な分析対象となり得ることは間違いない。

本稿における調査概要・出土資料の報告を契機に，当該期の社会・文化研究の進展に少しでも貢献し得ることを祈念しつつ，擱筆としたい。

謝辞

本稿をなすにあたり，九州大学考古学研究室に所蔵されている，城ノ越貝塚第1次調査の調査日誌や図面資料の公表を許可していただいた，宮本一夫先生には心より感謝申し上げます。また，鹿児島大学の石田智子先生と高松市教育委員会の梶原慎司氏には，当該土器資料の位置づけなどについて様々なご教示をいただきました。末筆ではございますが，御礼申し上げます。

注

- 1 これら古墳時代以降の遺物には、「B 2」や「I A 北区第 4 層」と記されたラベルが付されており、A 区から B 区上層にかけて出土したものと考えられ、上述した調査日誌から読み取れる遺物の層位的出土状況と矛盾はない。
- 2 『日本農耕文化の生成』の108頁第11図に図示された石器・骨角器は、九州大学考古学研究室に収蔵されていることを確認している。
- 3 A 類はいわゆる遠賀川以東系、B 類は遠賀川以西系とされてきたものに相当する。
- 4 胴部上半に施される沈線は、同位置に存在していた段のなぞりから出現することが指摘されている（家根1993；田畑2000；松尾2012など）。当該資料中に、胴部上半に段を有する甕形土器は確認できない。
- 5 口縁部から底部に至るまで残存しているような良好な資料はほぼ存在していない。よって、当該資料に関しては底部のみでの議論しかできず、口縁部形態など他の属性との対応関係は不明である。
- 6 なお、城ノ越貝塚の層位的出土状況については、以前から疑義を呈する論考が出されており（小田1973a）、そうした城ノ越貝塚や城ノ越式土器をめぐる研究史については齋藤瑞穂氏が詳細にまとめている（齋藤2022）。

参考文献

- 石田智子 2015 九州。佐藤由紀男（編），考古調査ハンドブック 12 弥生土器。ニュー・サイエンス社，pp.120-159。
- 岩永省三 1991 日本における青銅武器の渡来と生産の開始。小田富士雄・韓炳三（編），日韓交渉の考古学 弥生時代篇。株式会社六興出版，pp.114-119。
- 岩永省三 1994 日本列島産青銅武器類出現の考古学的意義。古文化談叢33。九州古文化研究会，pp.37-60。
- 小田富士雄 1973a 入門講座 弥生土器——九州 2——。月刊考古学ジャーナル77。ニュー・サイエンス社，pp.22-25。
- 小田富士雄 1973b 入門講座 弥生土器——九州 3——。月刊考古学ジャーナル79。ニュー・サイエンス社，pp.22-26。
- 鏡山猛・杉原荘介・渡辺正気・大塚初重 1961 福岡県城ノ越遺跡。杉原荘介（編），日本農耕文化の生成 第一冊 本文篇。株式会社東京堂，pp.89-109。
- 齋藤瑞穂 2009 九州弥生時代貝塚の再検討。平成21年度九州考古学会総会研究発表資料集。九州考古学会，pp.11-20。
- 齋藤瑞穂 2022 須玖式土器の大別と細別。考古学雑誌105-1。日本考古学会，pp.36-80。

- 下條信行 1975 北九州における弥生時代の石器生産。考古学研究22-1。考古学研究会，pp.7-14。
- 杉原荘介（編）1960 日本農耕文化の生成 第二冊 図録篇。株式会社東京堂
- 杉原荘介（編）1961 日本農耕文化の生成 第一冊 本文篇。株式会社東京堂
- 高倉洋彰 1986 弥生社会復元の試み II。金関恕・佐原真（編），弥生文化の研究 9 弥生人の世界。雄山閣出版株式会社，pp.25-33。
- 武末純一 1987 須玖式土器。金関恕・佐原真（編），弥生文化の研究 4 弥生土器 II。雄山閣出版株式会社，pp.17-33。
- 武末純一 2011 九州北部地域。甲元真之・寺沢薫（編），講座日本の考古学 5 弥生時代（上）。青木書店，pp.85-145。
- 武末純一・上田龍児 2006 弥生土器の編年と地域間交流。行橋市史編纂委員会（編），行橋市史 資料編 原始・古代。行橋市，pp.344-380。
- 田崎博之 1985 須玖式土器の再検討。史淵 122。九州大学文学部，pp.167-202。
- 田崎博之 1998 福岡地方における弥生時代の土地環境の利用と開発。小林茂・磯望・佐伯弘次・高倉洋彰（編），福岡平野の古環境と遺跡立地——環境としての遺跡との共存のために——。九州大学出版会，pp.113-137。
- 田中良之 2000 墓地から見た親族・家族。都出比呂志・佐原真（編），古代史の論点 2 女と男、家と村。小学館，pp.131-152。
- 常松幹雄 2011 甕棺と副葬品の変貌。設楽博己・藤尾慎一郎・松木武彦（編），弥生時代の考古学 3 多様化する弥生文化。同成社，pp.216-237。
- 溝口孝司 1998 カメ棺墓地の移り変わり。平成10年度福岡市博物館特別企画展 弥生人のタイムカプセル。福岡市博物館，pp.58-61。
- 溝口孝司 2000 墓地と埋葬行為の変遷——古墳時代の開始の社会的背景の理解のために——。北條芳隆・溝口孝司・村上恭通，古墳時代像を見なおす——成立過程と社会変革——。青木書店，pp.201-273。
- 宮本一夫 2020 東アジア青銅器時代の研究。雄山閣
- 森貴教 2018 石器の生産・消費からみた弥生社会。九州大学出版会
- 森貞次郎 1966 弥生文化の発展と地域性 九州。和島誠一（編），日本の考古学 III 弥生時代。河出書房新社，pp.32-80。
- 森貞次郎 1968 弥生時代における細形銅剣の流入について——細形銅剣の編年的考察——。日本民族と南方文化。金関丈夫博士古稀記念委員会，pp.127-161。

Received Nov. 2, 2023; accepted Nov. 24, 2023

Materials Excavated from the First Survey of Jonokoshi Shell Mound
in Onga Town, Fukuoka Prefecture:
Research of archaeological materials in the Kyushu University Museum Collection

Masahiro FUKUNAGA

The Kyushu University Museum
Hakozaki 6-10-1, Higashi-ku, Fukuoka, 812-8581 Japan

This paper reports on the excavated materials from the first survey of Jonokoshi Shell Mound in Onga Town, Fukuoka Prefecture, which are in the collection of the Kyushu University Museum. Analysis of the excavated Yayoi pottery revealed that the pottery excavated ranged from Itazuke II a style of the late Early Yayoi Period to Sugu II style of the late Middle Yayoi Period. Among them, Jonokoshi type of the early Middle Yayoi Period and Sugu I type of the first half of the Middle Yayoi Period were found to be particularly abundant. In addition, the results of the analysis of the stratigraphic conditions and excavated pottery in the first survey indicated that it is difficult to find a clear correspondence between the stratigraphic level and the newness or antiquity of the pottery.

Key words: the Kyushu University Museum Collection, report of materials, Jonokoshi Shell Mound, Yayoi period